

クロスロード

10



特集

協力隊後の生き方

～派遣国とかわり続ける～

派遣国の横顔

～ソロモン～



現在の派遣国数

72カ国



JICA海外協力隊 派遣現況

(2020年7月末現在、単位：人)

※新型コロナウイルスの感染拡大により、
派遣中隊員は全員一時帰国中です。

■ アフリカ地域

国名	一般	シニア
ウガンダ	35	2
エスワティニ	1	
エチオピア	12	
ガーナ	45	
ガボン	9	3
カメルーン	20	1
ケニア	30	3
ザンビア	39	5
ジブチ	8	
ジンバブエ	8	
セネガル	29	1
タンザニア	52	2
ナミビア	11	
ベナン	26	
ボツワナ	15	
マダガスカル	24	
マラウイ	16	
南アフリカ共和国	4	3
モザンビーク	27	1
ルワンダ	27	

■ アジア地域

国名	一般	シニア
インド	18	
インドネシア	10	1
ウズベキスタン	19	4
カンボジア	15	2
キルギス	21	
タイ	15	4
中華人民共和国	5	
ネパール	27	3
東ティモール	24	
フィリピン	19	2
ブータン	13	4
ベトナム	20	6
マレーシア	13	5
ミャンマー	11	
モルディブ	7	
モンゴル	30	
ラオス	31	

■ 大洋州地域

国名	一般	シニア
キリバス	1	
サモア	13	
ソロモン	15	1
トンガ	14	
バヌアツ	17	
パプアニューギニア	19	1
パラオ	7	5
フィジー	18	2
マーシャル	6	2
ミクロネシア	12	4

■ 欧州地域

国名	一般	シニア
セルビア	5	2

■ 中東地域

国名	一般	シニア
エジプト	7	
チュニジア	6	
モロッコ	16	2
ヨルダン	33	1

■ 中南米地域

国名	一般	シニア	日系一般	日系シニア
アルゼンチン		13	5	4
エクアドル	22	2		
エルサルバドル	13			
キューバ			1	
グアテマラ	15			
コスタリカ	23	5		
コロンビア	12	4		
ジャマイカ	15	2		
セントビンセント	3			
セントルシア	6			
ドミニカ共和国			26	3
ニカラグア	2			
パナマ	13	2		
パラグアイ	23	2	5	2
ブラジル			48	4
ペルー	12			
ベレー	27	4		
ボリビア	26			
ホンジュラス	19			
メキシコ	2	5		

■ 合計

	一般	シニア	日系一般	日系シニア	小計
派遣中 (男性/女性)	1,184 (497/687)	112 (85/27)	61 (22/39)	10 (5/5)	1,367 (609/758)
累計 (男性/女性)	45,776 (24,302/21,474)	6,553 (5,298/1,255)	1,542 (597/945)	547 (252/295)	54,418 (30,449/23,969)

一般＝青年海外協力隊/海外協力隊

シニア＝シニア海外協力隊

日系一般＝日系社会青年海外協力隊/日系社会海外協力隊

日系シニア＝日系社会シニア海外協力隊

クロスロード

2020 OCT
Contents

職種別索引	掲載ページ
コミュニティ開発	4
バイオテクノロジー	6
養蜂	4
養殖	20
青少年活動	10
環境教育	8、24、30
陸上競技	26
ソフトボール	26
柔道	32
自転車競技	21
ラグビー	26
理科教育	14
小学校教育	16
作業療法士	12
理学療法士	18
障害児・者支援	36

国別索引	掲載ページ
エクアドル	24
エチオピア	21
グアテマラ	30
コロンビア	20
ソロモン	6、8、18、36
タイ	12
ネパール	29
パナマ	4
バングラデシュ	16
ペルー	32
マレーシア	10
モザンビーク	4
モロッコ	36
ルワンダ	14

出身都道府県別索引	掲載ページ
北海道	18
山形県	10
埼玉県	12
東京都	16
新潟県	24
神奈川県	20
静岡県	8、14、21
大阪府	30
兵庫県	6
福岡県	32

【凡例】

JICA海外協力隊の方々（経験者を含む）については、次のように表記しています。

国際協子さん(ウガンダ・青少年活動・2019年度3次隊)

氏名	派遣国	職種	隊次
----	-----	----	----

JICA海外協力隊の種類（呼称）は、「青年海外協力隊」「海外協力隊」「シニア海外協力隊」「日系社会青年海外協力隊」「日系社会海外協力隊」「日系社会シニア海外協力隊」があります。特に明記されていない場合は「青年海外協力隊」となります。

本誌は、JICA海外協力隊が活動・生活を円滑に行うための実践的な情報、および帰国後の進路開拓や社会還元に関する有益な情報を提供し、対象者に配布しています。

ロゴタイプデザイン：(株) AND

レイアウト：(株) AND

印刷・製本：弘報印刷(株)

4

JICA Volunteers' Reports

- ▶ 任地で普及に努めた養蜂技術の動画を配信し、現地とのつながりを保つ（モザンビーク）
- ▶ パナマと日本のつながりを感じてほしい 日本人に向けたオンライン報告会の開催（パナマ）

派遣国の横顔

～ソロモン～

6

農林水産

柳田一樹さん（バイオテクノロジー・2017年度3次隊）

8

環境教育

清水梨沙さん（環境教育・2016年度4次隊）

特集

協力隊後の生き方

～派遣国とかかわり続ける～

10

国際交流

中鉢典子さん（マレーシア・青少年活動・2015年度1次隊）

12

国際協力

國谷昇平さん（タイ・作業療法士・2015年度1次隊）

14

ビジネス

浅野拳史さん（ルワンダ・理科教育・2015年度1次隊）

16

ビジネス

福嶋祐子さん（バングラデシュ・小学校教育・2014年度2次隊）

18

“失敗”から学ぶ

村田真奈美さん（ソロモン・理学療法士・2017年度3次隊）

20

希少職種図鑑

- ▶ 養殖 佐々木 拓さん（コロンビア・2017年度1次隊）
- ▶ 自転車競技 渡邊大貴さん（エチオピア・2017年度2次隊）

22

JICA海外協力隊的プチテクガイド

改善の方法／論理的思考の向上「囲碁入門」／収入向上活動

24

JICA Volunteers' Before ▶ After ～人生を変えた2年間～

水処理施設の運転管理者 宮 隆彰さん（エクアドル・環境教育・2014年度1次隊）

26

帰国後よもやま話

スポーツ分野隊員篇

28

Pick Up OB・OG会

- ▶ 特定非営利活動法人都市計画・建築関連OVの会
- ▶ 協力隊ネパール会

30

先輩隊員のシューカツ記

公益財団法人太平洋人材交流センター職員 狭間鮎奈さん（グアテマラ・環境教育・2015年度3次隊）

32

JOCV SPORTS NEWS

34

JICA海外協力隊のつぶやき

お題：「歯磨き」

35

INFORMATION

36

隊員めし

材料を切っただけ モロッコの家料理「タジン鍋」



ニホンミツバチの巣箱を開ける谷口さん(右)

動画配信の流れ	
(3月下旬) 巣箱への入居	一時帰国中にニホンミツバチが巣箱に入居。
(6月上旬) 採蜜の日程決め	蜜が十分に貯まったことを確認し、採蜜の日取りを調整。
(6月21日) 採蜜・撮影	早朝に採蜜。作業の様子を撮影。
(7月3日) 動画公開	編集後、YouTubeへアップロード。

任地で普及に努めた養蜂技術の動画を配信し、現地とのつながりを保つ

Mozambique Japan

文・実施者 = 谷口智亮さん(モザンビーク・養蜂・2018年度2次隊)
 実施者 = 長岡美里さん(コミュニティ開発・2019年度2次隊)、倉本衣織さん(コミュニティ開発・2019年度2次隊)、栗原瑞穂さん(コミュニティ開発・2019年度2次隊)、派遣国はすべてモザンビーク



Como é que se Colhe o Mel na Caixa Japonesa
 ニホンミツバチの採蜜～ポルトガル語ver～
 動画URL
<https://youtu.be/ladu0nvxVH4>



6月21日、長崎県にある私の自宅に長岡隊員、倉本隊員、栗原隊員が集まり、ニホンミツバチの重箱式*巣箱の採蜜を行いました。6月上旬に巣箱の蜜が十分に貯まっていることを確認し、新型コロナウイルス感染症における緊急事態宣言が解除され、感染状況も一旦落ち着いたら頃、天気予報の晴れが続くこの日に決行することにしました。

重箱式巣箱の養蜂技術は、私の任地であるモザンビーク・イニャンバネ州イニャリメ郡で普及させようと努めていたものです。しかし、現地の天候不順と新型コロナウイルス感染症による一時帰国により不十分なままでした。現地での活動ができない現状で、日本でできることを模索していました。

モザンビーク事務所配属された栗原隊員には、養蜂やミツバチについて学んでもらうことができると思いました。さらに、作業の様子を撮影し、動画を任地の同僚らに見てもらえるようにと考えました。

私がポルトガル語で解説を交えながら長岡隊員、倉本隊員と共に作業し、栗原隊員がビデオ撮影を担当。後日、ポルトガル語の字幕やBGMを入れて編集し、動画の後半でモザンビークに向けた私たち4人のメッセージを添えることにしました。その理由は、日本の養蜂技術の紹介だけでなく、動画が私たち隊員とモザンビークの同僚らとのつながりを保つための一助となつてほしかったからです。

動画をYouTubeで公開後、現地の配属先長からは「この技術をイニャンバネで伝えてくれるのを待っている」とメッセージをいただきました。この動画が任地と日本をつなぐ役割を果たしたと実感しています。そして私たちが日本で元気にしていることが伝わったはず。

新型コロナウイルス感染症の影響で現地の活動ができない今、大切なのはつながりを途絶えさせないことです。SNSやYouTubeが普及した現代だからこそ、離れていてもつながることがあります。

いつになったらモザンビークに帰れるのか……、先が見えない不安もあります。しかし嘆くばかりでは何も起こりません。小さくてもできることを見出し、任地とのつながりを保つ。そんな日々の先に仲間たちとの再会があると信じています。

*重箱式巣箱…ニホンミツバチの主流な養蜂技術で、重箱のようにいくつかの箱を重ね、上に蓋をした巣箱。セイヨウミツバチの養蜂では、巣の枠をあらかじめ入れておくラングストロス式巣箱がよく使われている。

開催の流れ	
(5週間前) 企画	パナマ隊員6人で、イベントを企画。
(4週間前) 会議	企画書をもとに、JICAパナマ事務所員と話し合い、意見交換を実施。
(3週間前) 詳細決定	発表者・発表内容・オンラインツールの詳細、広報方法を決定。
(2週間前) 広報開始	SNSやイベントサイトを用いてイベントの広報を開始。
(1週間前) リハーサル	発表者、JICA関係者とともにリハーサルを実施。
(1週間後) 振り返り会	企画者、JICA関係者でアンケート結果を共有し、振り返りを行った。



報告会で話し合う、企画者、発表者、ミゲルさん。隊員の職種は、作業療法士、栄養士、小学校教育、理科教育、コミュニティ開発など

パナマと日本のつながりを感じてほしい日本人に向けたオンライン報告会の開催

Panama Japan

文 = 道願正歩さん(パナマ・作業療法士・2018年度2次隊)

私は約1年半パナマで作業療法士として特別支援学校で活動し、新型コロナウイルス感染症の蔓延による状況悪化のため帰国しました。帰国直前のことを振り返ると、まさに「混乱」であり、活動の不完全燃焼を感じ、同僚・友人にきちんとあいさつをできなかったことが心残りでした。

帰国後、パナマの感染者数増加による外出禁止措置が取られたことを知り、現地の人たちがやりたいことを自由にできないことで、国中に悲しみが広がっていると推察しました。そんなパナマのために、今の状況でできることを考え、6人のパナマ隊員で「オンライン報告会 パナマ×JICA海外協力隊」というイベントを企画しました。

目的は、隊員や隊員OB・OG、JICA関係者以外を主対象として活動内容を発信することで、パナマや国際協力に興味を持つ人を増やし、今後の国際的なかわりの活性化につなげることを考えました。また、パナマの方たちにも、パナ



パナマ紹介の 슬라이ド。基本情報、文化に加え、パナマで有名な「パナマ運河」も紹介。比較的裕福な国であるパナマになぜ隊員が派遣されているのかという切り口から、パナマの背景・教育システムを紹介し、活動報告を行った

マと日本の「つながり」を感じてもらい、元気を与える企画になればと思います。内容は、活動報告、パナマ人のミゲルさんによるパナマや教育制度の紹介、JICA関係者を含めた座談会などを設けました。慣れないオンラインでのイベントのため、正確に「想い」を伝えられるような構成・内容になるよう、企画者・発表者で話し合いを重ねました。

開催当日の7月19日、隊員や隊員のOB・OG、発表者の知人、JICA関係者など約80人に対し、ミゲルさんと発表者がそれぞれの想いを含め、発表を行いました。

終了後のアンケートでは、「進行・内容ともに良く、パナマや国際協力について知ることができた」、「自分にとっても次に進みきっかけになった」と一般の方や他隊員のコメントをいただきました。今後、パナマの人たちに向けて、報告会映像をSNSに投稿する予定です。

ボランティアの語源が「自ら進んでする」を意味するように、自発性を持って行動に移し、責任を持って自分の活動が意味のあることなのかを考え続ける姿勢が、国際協力をすすめる上で求められる点であると私は思います。また、距離が離れていても、想いがあれば国際協力ができるという新たな可能性も同時に感じました。私はJICA海外協力隊としての活動を終えました。今後は一人のボランティアとして人々のために何ができるのか、常に考えて行動していきたいと思えます。

*企画者・発表者＝道願正歩隊員、櫻木さやか隊員(栄養士・2018年度2次隊)、對比地茶由隊員(小学校教育・2019年度1次隊) 発表者＝野末大貴隊員(コミュニティ開発・2017年度2次隊)、小寺麻里菜隊員(コミュニティ開発・2018年度1次隊)、本田徹隊員(理科教育・2019年度1次隊) *2ミゲル・アルマンザンさん。パナマ隊員のカウンターパートの経験を経て、日本に興味を持ち、現在は弘前大学大学院にて日本の教育システムについて学んでいる。

派遣国の横顔

JICA海外協力隊の派遣国ごとに、それぞれの代表的な職種・分野の活動例を、任地の文化や様子と共に紹介します。



Field 1 農林水産



やなぎだかずき
柳田一樹さん
(バイオテクノロジー・2017年度3次隊)

PROFILE
1980年生まれ。兵庫県出身。神戸大学大学院自然科学研究科修士課程を修了後、バイオテクノロジーに関する事業を手がけるベンチャー企業や食品会社の研究職を経て、2018年1月に青年海外協力隊員としてソロモンに赴任。20年1月に帰国。

活動概要
ソロモン農業畜産省農業試験部(首都ホニアラ)に配属され、主に以下の活動に従事。
●農作物の病虫害への対策の支援
●新設された実験棟のセットアップ支援

農作物の病虫害に 国が自力で対処できるように 検査体制を確立

ソロモン政府の農業部門に新設されたバイオテクノロジー専門の部署に配属された柳田さん。着任当時、農作物の病害への感染を診断できる人材がいなかったことから、その育成に取り組んだ。

簡易な検査方法を導入

柳田さんが派遣されたのは、ソロモン農業畜産省農業試験部。農作物の病虫害対策や生産性向上などに関する実験を担当する機関だ。配属部署はバイオテクノロジー室。病害への感染の診断は、病原体に固有のDNAだけを増幅させ、その存在が検出できるようにする方法が一般的である。同室は、バイオテクノロジーを農業に活用するそうした業務を担当する部署だった。設置は柳田さんの着任の直前。同僚は2人配属されていたが、いずれもバイオテクノロジーを扱うのに必要な分子生物学の専門性を持っておらず、柳田さん求められるれていたのは、彼らへの技術支援だった。

ソロモンは、長さが100〜200キロほどの細長い6つの主要島と、約1000にのぼる火山島や珊瑚島からなる国。島国は本来、海が防壁となるため、農作物の病虫害の侵入は防ぎやすいはずだが、同国にはもろさがあった。西端の有人島のわずか10キロ先には隣国・パプアニューギニアの島がある。その間を小さな船が行き来し、パプアニューギニアの農作物が検査を受けることなくソロモンに入ってしまうのだ。

柳田さんが赴任したのは、パプアニューギ

- *1 病虫害…病原体による農作物の被害(病害)と、害虫による農作物の被害(虫害)。
- *2 バイオテクノロジー…生物が持つ働きを人間の生活のために活用する技術。
- *3 分子生物学…生体を構成する分子のレベルで生命現象を解明する学問。

ニアで爆発的に広がった「ファイトプラズマ病」という病害がソロモンでも出始めた時期。ファイトプラズマという細菌が病原体の伝染性の病害で、感染する植物はさまざまだが、ソロモンではバナナが感染し、枯れてしまう例が出ていた。症例はいずれもパプアニューギニアに近い西端のエリアのバナナだった。

伝染性の病害がいったん島に入れば、すぐさま感染が拡大してしまう。対策で重要なのは、感染のおそれがある植物を採取して感染の有無を確かめ、感染していたらその個体を処分するという作業をなるべく早期に進めることだ。ところが、柳田さんの着任当時、ファイトプラズマ病の感染の診断ができる人材が国内にいなかった。感染拡大をソロモンの人々が知ったのも、オーストラリアの検疫官が自国の対策のためにソロモンでバナナを採取し、診断結果を論文で発表したからだ。そうして、バイオテクノロジー室でファイト

プラズマ病の感染診断ができるよう支援することが、柳田さんの主要な活動となった。最初に行ったのは、ファイトプラズマのDNAを増幅させる方法の選択だ。配属先には「PCR法」という増幅方法のための機材が導入されていたが、分子生物学の専門性を持たない人には作業が難しい方法だった。替わする方法として検討したのは、日本の企業が開発した「LAMP法」という増幅方法だ。PCR法よりも作業が簡易で、1回分の検査に必要な試薬や機材がすべてセットになっているキットも、やはり日本の企業により製造・販売されていた。そのキットに関する情報をくれば、農業試験部の部長だ。数年前に農業畜産省で共同研究をした日本人の専門家が、キットの存在を教えられたと話した。

メーカーに問い合わせたところ、そのキットには決定的な利点があることが判明した。DNAを扱う検査の試薬は通常、劣化を避け



① 新設の実験棟で同僚たちにLAMP法のやり方を指導する柳田さん
②③ ファイトプラズマ病の感染状況を調べるため、ジャングルでバナナの葉を採取する柳田さんの同僚
④ 柳田さんの任期中、ソロモンではヤシ類を枯らす害虫のカブトムシが問題になっていたことから、駆除に有効なウイルスを見つけるための実験にも取り組んだ



派遣国の横顔

任地ひとロメロ (ホニアラ)



ソロモンの重要な換金作物の1つであるアブラヤシの広大なプランテーション



右: 浸水や虫の侵入を避けるため、家は高床式が一般的だ
左: 道端で出されているココナツジュースの店

るために冷凍状態で輸送、保管することが必要だが、目当てのキットの試薬はすべて乾燥させたものであり、常温での輸送、保管が可能だった。輸送にかかるコストが低く抑えられる点、あるいは電力が不安定ななかで冷凍庫の電源を確保し続ける必要がない点などから、ソロモンで導入するには好都合だった。キットのそうした利点を知り、農業試験部の部長も導入を了承。柳田さんの任期中に100サンプルの診断ができる量のキットを部の予算で輸入し、同僚たちと共にジャングルでバナナを採取してきては、配属先で診断するということを繰り返した。分子レベルのものを使うことに慣れていない同僚たちは、「私は農作物をいじっているほうが好き」などと抵抗感を示したが、柳田さんは自らやってみせながら「大丈夫だ」と鼓舞。やがて彼らだけでこなせるまでになった。

実験棟の整備にも尽力

農業試験部は、柳田さんの着任の直前に新しい実験棟を完成させていた。無菌操作が必要な実験ができる国内で唯一の施設とする狙

であったが、どのような機器や消耗品を揃えれば良いのかがわかる人がいなかったため、柳田さんの着任時には実験棟は「空っぽ」だった。そこで柳田さんは、そのセットアップも支援。導入する機器や消耗品の選定を担った。着任1年後にはある程度の環境が整い、農業畜産省以外の省庁にも、無菌操作が必要な実験をする際には貸し出すようになった。

実験棟が活用されるようになって浮かび上がったのは、「利用方法」に関する問題だ。一つは、実験で出る危険な廃液やゴミの処理に関する問題。同国には規制する法律も、処理を請け負う業者も存在しない。そのため、当初は戸外に安易に垂れ流したり、ほかのゴミと一緒に土に埋めたりしてしまうような状態だった。もう一つの問題は、実験棟の中の清潔さに関するもの。DNAなどを扱う実験では、「汚れ」や「ほこり」が大敵であるにもかかわらず、同僚たちは素足で外を歩き、そのまま実験室に入ってしまうのだった。柳田さんはこれらを農業試験部の部長に進言した。すると、柳田さんにアドバイスを仰ぎながら、部長自身が実験棟の使い方に関するルールを作成。遵守が図られるに至ったのだ。



しみずり さ
清水梨沙さん
(環境教育・2016年度4次隊)

PROFILE

1987年生まれ、静岡県出身。保険や雑誌広告の営業職を経て、2017年3月、青年海外協力隊員としてソロモンに赴任。19年3月に帰国。

活動概要

イザベル州政府の環境保全課(同州プアラ)に配属され、ゴミに関する主に以下の活動に従事。
●3Rについて伝える講習の実施
●ペットボトルやプラスチックゴミを再利用した雑貨の製作・販売による3Rの啓発

ゴミに関する啓発を目的に ペットボトル製のピアスを 製作・販売

ゴミに対する住民の意識の向上を目的とした活動に取り組んだ清水さん。活動のヒントを「外」に求めたところ、ペットボトルでピアスを製作し、マーケットの買い物客に販売する活動などへと幅を広げることができた。

清水さんの配属先は、首都からプロペラ機で40分ほどの距離にあるイザベル州の州政府環境保全課。自然環境の保護、ゴミの管理、環境に関する住民への啓発などを所管する部署だ。唯一の同僚の専門は、自然環境の保護など「グリーン系」と呼ばれる領域。同州はウミガメの産卵場所がある自然保護区を有しており、彼はその管理などで手一杯だった。そうしたなかで清水さんに期待されていたのは、3Rの推進など「ブラウン系」と呼ばれる領域に関する啓発活動の活性化だ。

任前半は「便乗商法」

配属先の庁舎や清水さんの住まいがあったのは、州都プアラ。長さが150キロほどの細長いサンタイザベル島に位置していた。道路網の整備が進んでおらず、島内の他地域に行くのにもボートを使うのが通常だった。しかし、配属先には当時、ほとんど予算がなかったにもかかわらず、ガソリン代が他州に比べても高く、リットルあたり300円近くにのぼった。そのため、ボートを利用するのは複数の職員で出張する際に限られ、啓発活動のために清水さんが単独で利用することなどは

きなかった。

そうしたなかで清水さんは、任期の前半、「他部署が出張でボートを使う際に便乗させてもらう」という方法で州内各地を回り、ゴミに関する講習会を開いた。日頃から、休憩時間などを利用して他部署を訪ねては、「今、どのような仕事をしているのですか?」などと探りを入れる。「先週はうちの部署で●●に出張に行った」と聞くと、「私も行きたかったです」とアピール。すると次第に、「来週、うちの部署で出張に行くけれど、一緒に行く?」と誘ってもらえるようになっていった。

例えば、女性支援を行う部署の出張に同行したら、集まった支援対象の女性たちを相手に、風呂敷包みの仕方やエコバッグの作り方の講習を行う。観光に関する事業を行う部署によるクルーズ船の停泊予定地への出張に同行したら、「外国の人に良い印象を持ってもらえるよう、ゴミのポイ捨てはめましよう」と呼びかける講習を行う。そんな「便乗商法」を続けたが、他部署の出張は頻繁にあるわけではなく、暇を持て余す時間も多かった。そんなときは、徒歩で行ける地域に向いてゴミ拾いに動んだが、「協力隊らしい活動ができていない」との悩みは深まっていった。

そうして任期中に製作、販売したピアスは400個あまりにのぼる。価格は左右のペアを70〜150円程度に設定。その売り上げで啓発イベントを実施したほか、小さなゴミかごを約70個購入し、任地の小学校11校と幼稚園2園に寄贈した。従来、数百人の児童がいるような学校でも校内には大きなゴミ箱が一つしかなく、教室の窓から外にゴミをポイ捨てしているような状態だったからだ。この寄贈の話題は地元新聞でも取り上げられた。

あるとき、清水さんがマーケットでいつものようにピアスを売っていると、常連客が友人を連れてやって来た。「このピアスの素材は何?」と尋ねる友人に対し、常連客は「ペットボトルよ。この日本人女性はゴミの問題を解決するための活動をしているの」と、清水さんが伝えたことを代弁。ピアスの販売を通じて、住民に意識の変化を生むことができているのだと確認できた瞬間だった。



マーケットで清水さんのペットボトル製ピアスに興味を示す買い物客



①清水さんが製作・販売したペットボトル製ピアス
②ピアスの売り上げで寄贈したゴミかごを使い、校内でゴミ拾いをする子どもたち
③清水さんはプラスチックゴミを再利用してポーチをつくる方法をマーケットの買い物客に伝える活動にも取り組んだ

400個あまりのピアスが完売

状況が好転するきっかけとなったのは、「活動の滞りを打開したい」と輩にもする思いで「外」に目を向けたことだった。その一つが、環境教育隊員たちによる「分科会活動」である。当時、ソロモンでは複数の環境教育隊員が活動していたことから、情報やアイデアを交換し合うことを彼らに提案したところ、受け入れてもらった。開いた分科会では、「任地」「配属先」「自分自身」「協力者」のそれぞれについて状況を整理する分析シートに各隊員が記入したうえで、それをもとに以後の活動に関する意見を交換すると、シートの記載には一人だけ突出した違いがあった。「協力者」の欄に書かれた人や団体の数が、ずば抜けて多かったのだ。その隊員はゴミに関する啓発の一環として、プラスチックゴミを再利用してポーチをつくる活動に取り組んでおり、それがうまく回っていることは清水さんも知っていた。

た。その成因は「協力者」の獲得にあったのだろうと考えた清水さんは、「便乗商法」を脱しようと決意。ボートを使わずに行ける近所のマーケットなどにこまめに足を運び、そこで住民とのつながりを広げ、何かしらの活動を展開しようと考えようになった。

目を向けたもう一つの「外」は、「盗めるものがあれば盗んで帰りたい」という思いで訪れた隣国のバヌアツだ。同国で活動する環境教育隊員に依頼し、活動現場やゴミ処理場などを見学させてもらった。その滞在中に、ジュースの瓶の破片でつくったネックレスが土産物店で売られているのを目にする。デザインが魅力的で、「売れるはず」と直感した。

以上の2つの刺激から、清水さんが任期の半ば過ぎに新たに作り組むことにしたのは、ゴミを再利用したアクセサリーをつくり、徒歩で行けるマーケットなどで買い物客に販売する活動だ。素材として選択したのは、「ペットボトル」。首都には資源ゴミとして有料で買

任地ひとロメモ 〈イザベル州〉



州都プアラがある主島の船着場。同島から首都へはプロペラ機で約40分、船ならその規模により8〜24時間ほどかかる



右: 現地の祭りで古来の民族衣装をまとった住民と
左: イザベル州政府が出張で使うために持つモーターボート

協力隊後の生き方

～派遣国とかかわり続ける～

現地の人と共に生活し、活動する協力隊員。そのなかで得られる現地の情報や現地の人とのネットワークを活用して、任期終了後も派遣国とかかわるボランティア活動や仕事に携わりたいと考える人も少なくないだろう。本特集では、それを実践している協力隊経験者の事例をピックアップしてみた。

case1 国際交流 × マレーシア



母国で障害者施設を運営する2人のマレーシア人（左端と右から2人目）が福島に来た際に住民と行った、料理を持ち寄っての交流会の様子

ともだち・カワン・コミュニティ 代表
中鉢典子さん（マレーシア・青少年活動・2015年度1次隊）

多文化に触れる機会をつくる団体を設立

高校教員として協力隊に現職参加した中鉢さん。帰国後に初めて暮らすことになった福島で「地域」へのまなざしが生まれたことから、地域の人々が多文化に触れる機会をつくるボランティア団体を相次いで立ち上げた。

COMPANY PROFILE

ともだち・カワン・コミュニティ

設立：2019年
会員数：10人
活動拠点：福島県
事業内容：福島とマレーシアの人々をつなぐ活動など
連絡先：tomodachi.kawan.c@gmail.com

PROFILE

ちゅうばち・のりこ
1984年生まれ。山形県出身。大学卒業後、国語科教員として宮城県の高校に勤務。2015年6月、青年海外協力隊員としてマレーシアに赴任（現職教員特別参加制度）。17年3月に帰国し、復職。19年、日本とマレーシアをつなぐ活動に取り組む任意団体「ともだち・カワン・コミュニティ」を設立。

「〜ともだち・カワン・コミュニティ」（以下、「カワン」）の事業の概要をお教えください。

私が住んでいる福島で、「多様な文化が出会い、ひとりひとりが輝く場」をつくる活動に取り組んでいる団体です。協力隊時代に知り合ったマレーシア在住の同国人男性（以下、Aさん）と共に、昨年1月に立ち上げました。彼はかつてボランティアセンターの運営に携わり、現在は大学でボランティア論の講師などを務めている方です。東日本大震災以降、彼は福島の人のためにボランティア活動がしたいと思っていたものの、そのチャンスがなかった。そうしたなか、私が福島に住んでいると知り、「福島の人とつないでほしい」と相談してきたのが、団体立ち上げのきっかけです。彼には、東南アジアの若者が外国で自分の力を生かしたボランティアに取り組む機会をつくりたいという思いがあり、「カワン」もゆくゆくはそうした広範な役割を担えるようにしたいと考えています。そこで、マレーシアの人が福島でボランティアをする機会をつくることから活動をスタートさせました。これまでに4人のマレーシア人を福島に招き、それぞれの得意技を生かした活動を行っていただいています。アーティストには絵画の技法のワークショップの講師を務めてもらう、障害者施設の運営者には福島県内の障害者福祉の関係者とのデイスカッションに参加してもらう、といった具合です。

「カワン」の運営体制は？
マレーシア人が福島に来た際の活動内容の考案や、今後来てもらうマレーシア

「〜ともだち・カワン・コミュニティ」の事業の概要をお教えください。

私が住んでいる福島で、「多様な文化が出会い、ひとりひとりが輝く場」をつくる活動に取り組んでいる団体です。協力隊時代に知り合ったマレーシア在住の同国人男性（以下、Aさん）と共に、昨年1月に立ち上げました。彼はかつてボランティアセンターの運営に携わり、現在は大学でボランティア論の講師などを務めている方です。東日本大震災以降、彼は福島の人のためにボランティア活動がしたいと思っていたものの、そのチャンスがなかった。そうしたなか、私が福島に住んでいると知り、「福島の人とつないでほしい」と相談してきたのが、団体立ち上げのきっかけです。彼には、東南アジアの若者が外国で自分の力を生かしたボランティアに取り組む機会をつくりたいという思いがあり、「カワン」もゆくゆくはそうした広範な役割を担えるようにしたいと考えています。そこで、マレーシアの人が福島でボランティアをする機会をつくることから活動をスタートさせました。これまでに4人のマレーシア人を福島に招き、それぞれの得意技を生かした活動を行っていただいています。アーティストには絵画の技法のワークショップの講師を務めてもらう、障害者施設の運営者には福島県内の障害者福祉の関係者とのデイスカッションに参加してもらう、といった具合です。

人の人選やトレーニングなどはAさんが担当しています。一方、プログラムの実施を受け入れてもらう場の開拓など日本側の調整は、「カワン」のメンバーとなってくださった福島の方と私で行っています。私は帰国してから「カワン」を立ち上げるまでの間に、日本で暮らすムスリムの方と日本人が交流する場をつくる「Tigami」という団体や、本を通じ、国籍や性別、年齢を超えて交流する「ぶっくしまふくしま」という団体を、協力隊の仲間などと共に宮城や福島で立ち上げていました。「カワン」の活動に参加してくださっているのは、そうした活動を通してつながった方々です。有給のスタッフはおらず、活動にかかる費用は、現在までのところ自治体の補助金や寄付金などでまかっています。

「3つもの団体を立ち上げたモチベーションはどこにあるのでしょうか。」
私は派遣前も帰国後も勤務先は宮城県

の高校で、帰国後に夫の仕事の都合で初めて福島県で暮らすことになりました。当初、福島は寝に帰るだけの場所だったのですが、子どもが生まれ、育児休暇に入ってから、福島に目が向くようになりました。そうして地域の方々とつながりが増えると、知らない地で子育てをする不安がみなさんの支えで解消されました。その恩返しをしたいというのが、モチベーションの一つです。もう一つは、協力隊時代にマレーシアの方々に支えていただいたことへの恩返しです。

「福島の人にとって、「カワン」のプログラムがどのように響いているとお感じになっていきますか。」
異文化理解の第一歩は、「この国の人はこうだ」「この民族の人はこうだ」とひと括りで捉えるのではなく、同じ国、同じ民族でもひとりひとりに違いがあり、「個々で付き合ってみれば、異文化の人と言えども、実は自分と変わりのない人間

なのだ」と実感することだというのが、私が協力隊経験で得た理解です。その点で「カワン」の活動は、同じマレーシア人でも「多様性」があることを実感してもらうことができている、それが存在意義の一つだと感じています。マレーシアが多民族国家ということもあるのですが、Aさんを含め、これまで「カワン」のプログラムで福島に来た4人のマレーシア人は、「イスラム教徒のマレー系」「英語を話す中華系」「中国語を話す中華系」などさまざまです。そのため、複数のプログラムに参加した福島の方から、「自分は4人の子もがいて、個性はそれぞれなのだけれども、マレーシア人も同じようにひとりひとり違うのですね」といった感想をいただくことができました。他方、コミュニティが苦手だったり、対人不安などの生きづらさを抱える人たちの居場所づくりに取り組んでいるメンバーは、「カワン」のプログラムがきっかけ

となって海外に目を向けることで、支援の対象者が日本での生きづらさを乗り越える力を得ることができるとお話しされておりました。そうした点にも「カワン」の存在意義があるのだと思います。

「今後の抱負をお聞かせください。」
Aさんはよく、「人は顔で笑っていても、心で泣いているかもしれない」と口にします。彼自身、子どものころにつらい経験をしているので、「心で泣いている人」のことに目が向く。そんな彼が大切だと感じている「若者が外国で自分の力を発揮してボランティア活動に取り組み、自身も成長する」という体験は、まさに協力隊そのもので、私が体験させていただいたものです。だからこそ、彼との協働はできる限り継続し、発展させていきたい。教員の仕事や育児との両立はたやすくはないと思いますが、「マレーシア」や「福島」を超えた活動へと幅を広げていければと考えています。



帰国後

上:Aさん(右)が「カワン」の活動の可能性を探るために福島に来たときのひとコマ。「ぶっくしまふくしま」のイベントに参加し、マレー語で紙芝居を披露したり、マレーシアの遊びを通して子どもたちと触れ合ったりした。子どもたちには、垣根を感じないでAさんに接する姿が見られた

下:福島で絵画のワークショップを行ったマレーシアのアーティスト(右から2人目)と、参加した住民たち



協力隊

サラワク州立図書館に配属され、Aさんが所属していたボランティアセンターなどと協力しながら、利用者の増加を目的に日本文化を紹介するイベントの開催などに取り組んだ。写真は、配属先でマレーシアの伝統的な刺繍のワークショップを開催した際の講師(中央右の2人)と参加者たち。「刺繍を教えてほしい人」と「教えたい人」をマッチングさせたことで実現した。刺繍の練習を重ねた参加者(中央)は、高水準の作品をつくり出すようになり、新聞でも取り上げられた。「彼らは、帰国後も手工芸について情報交換をする生涯学習の仲間となりました。」(中鉢さん)。

協力隊後の生き方
～派遣国とかわり続ける～



PROFILE

くにや・しょうへい
1982年生まれ、埼玉県出身。大学と専門学校を卒業した後、作業療法士として病院に6年間勤務。2015年6月、青年海外協力隊員としてタイに赴任。17年6月に帰国。日本で非常勤職員や個人事業主として訪問リハビリなどの仕事を掛け持ちつづけた。18年4月、アジアの国々で高齢者への健康支援を行うNPO法人「Rehab-Care for ASIA」を設立し、理事長に就任。

COMPANY PROFILE

NPO法人
Rehab-Care
for ASIA

設立：2018年
会員数：10人
事務所所在地：京都府
事業対象国：インドネシア、タイ、マレーシア、ミャンマー
事業内容：高齢者の健康支援



case2 国際協力 × タイ



ReCAの活動として、タイのデイケアセンターでボランティアスタッフたちにリハビリ技術の研修をする國谷さん(中央)

NPO法人 Rehab-Care for ASIA 理事長
國谷昇平さん(タイ・作業療法士・2015年度1次隊)

高齢者への健康支援に取り組む
国際協力活動をスタート

協力隊時代、高齢者の介護予防を目的としたデイケアセンターの設立に尽力した國谷さん。その支援を継続し、かつアジアの他の国にも同種の活動を展開すべく、帰国後、保健・医療分野の専門性を持つ仲間と共にNPO法人を立ち上げた。

「Rehab-Care for ASIA」(以下、ReCA)の事業の概要をお教えください。

アジアの国々で高齢者の健康支援に取り組んでいる団体です。タイでの活動からスタートし、マレーシア、インドネシア、ミャンマーへと対象国を広げました。これらの国々では高齢化が進みつつあるのですが、リハビリや介護の仕組みがまだ整っておらず、四肢に障害を負った高齢者が自宅で寝たきりとなり、家族が介護に大変な苦勞をしなければならぬという状況にあります。そうしたなか、高齢者を対象としたデイケアや訪問リハビリの拡充を目指し、リハビリの専門性を持たない現地の方々へリハビリや介護、栄養に関する研修を行うなどの活動を進めています。

事業の実施体制は？

設立時に団体のコンセプトの一つとしたのは、アジアで高齢者の健康支援に取り組むたい人たちの「プラットフォーム」となることでした。ある国のことを良く知るメンバーがそれぞれ主体となり、その国における問題を分析し、解決に向けたプロジェクトの計画を立て、実行していく。そのうえで、メンバーが各国の情報を交換し、知識を深め合ったり、助成金申請の作成で協力し合ったりする。そうした形で活動を進めており、前述の4カ国のプロジェクトのうちの3つは、それぞれの国で作業療法士隊員や看護師隊員として活動した協力隊隊員がリーダーを務めています。

ReCAのもう一つのコンセプトとしているのは、メンバーはみなほかに本



※ReCAのメンバーの詳細はウェブサイト内で紹介されています。

業を持ちながら、「2枚目の名刺」として活動に携わるといえるものです。そのなかで、徹底して現地の人が求めていることだけを厳選し、実行する。実際、各プロジェクトのリーダーはみな、日本ではかの仕事をしながら、年に数回程度の現場訪問とSNSの活用によって、可能な範囲で活動を進めています。

設立のきっかけは？

私は協力隊時代、リハビリが必要だけれども、リハビリが受けられる病院が遠く、通うのが困難な高齢者のお宅を500軒ほど回り、家族に対して支援のアドバイスなどを行いました。そうした活動を通してわかったのは、リハビリが受けられないばかりに容易に寝たきりになってしまうケースが多いことです。そこで行政と掛け合うなどしたところ、任期の終盤、役所の空室を「デイケアセンター」とし、高齢者が介護予防のために体を動かす機会をつくるプログラム

が始まりました。そこで働くのは、リハビリや介護の専門性を持たないボランティアなのですが、彼らに技術を十分に伝えられないまま、任期が終了となってしまいました。必死に動き、設立が実現したそのデイケアセンターの持続に、帰国後もなんとか力になりたいと思ったのが、ReCA設立の端緒です。最初の活動は、そのデイケアセンターのスタッフを対象に研修を行うことでした。

自ら地域の高齢者の問題を探り出し、デイケアセンター設立という解決策を考案、実行するという、「自分で考え、自分で行動する」経験を協力隊時代にできたからこそ、既存の団体に所属するのではなく、自ら団体を立ち上げて国際協力活動が続けるという発想ができたのだらうと感じています。

帰国後に「個人として行う」「ビジネスとして行う」などさまざまな選択する方法には、「個人として行う」「ビジネスとして行う」などさまざまな選択

肢があったかと思えます。「NPO法人」として取り組むことを選択したのは、どのような理由からでしょうか。

帰国後に協力隊活動から一歩先に踏み出すならば、自分の派遣国であるタイ以外でも行いたいという思いがあり、一人の力では無理なので、仲間を集めて団体として取り組むしかない。しかし、「株式会社」などを立ち上げ、ビジネスとして実践するのは難しいと判断しました。第一に、私自身にビジネスのノウハウがなかったからです。また、アジアの国々では「介護保険」の制度などはまだなく、リハビリや介護が必要な高齢者は経済的な余裕がある人ばかりではないので、運営資金は寄付や助成金に頼らざるを得ないからです。NPOの法人格を取ることにしたのは、日本で寄付や助成金を得るうえで、現地の関係者から信用を得るうえで、有益だと考えたから

です。実際、これまで日本国内でプロジェクトごとに助成金をいただくことができているし、タイのプロジェクトでは対象サイトの保健行政機関と公式のMOU(合意書)を結び、新たなデイケアセンターの場所の確保や、ReCAの活動に必要な実費の負担などの確約を取り付けることができました。

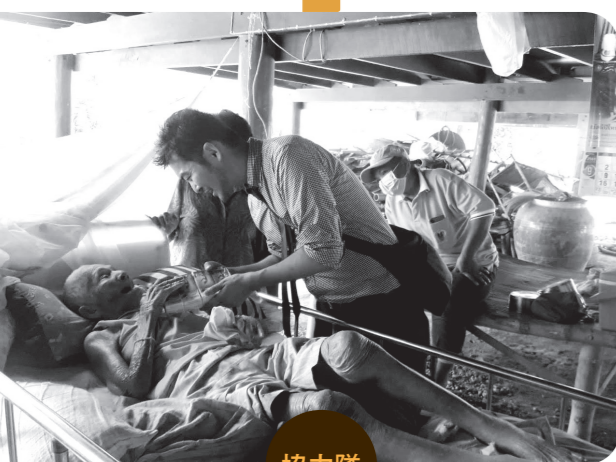
今後、ReCAをどのような方向に進めていきたいとお考えですか。

タイでReCAがかかわっているデイケアセンターのボランティアスタッフたちは、「給料が払われることになったら、お金のために動くようになるから嫌だ」とおっしゃいます。私の協力隊の2年間は、そうした「地域の困っている人のために役に立ちたい」という方々と巡り合うための旅だったと感じています。アジアの各国に必ずやいるそうした方々をさらに発掘し、そのサポートをしていきたいと思います。



帰国後

上:タイの活動サイトの保健行政機関やボランティア団体とMOUを結んだ際の調印式の様子
下:新たなデイケアセンターの設立に向け、タイの首都バンコクの保健所で聞き取りを行う國谷さん(右から2人目)



協力隊

配属先は、タイ・ラーチャブリー県ポーラー郡の総合病院。リハビリを受けるために入院できる期間は1カ月程度に限られていたため、脳卒中などで四肢に障害を負った高齢者が「座る」「歩く」などの機能を回復する前に自宅に戻らざるを得ず、結果、寝たきりになってしまうケースが多かった。國谷さんはそうした患者の自宅を回り、家族に支援の方法をアドバイスする一方、リハビリが必要な高齢者が通って機能回復に向けた運動ができるデイケアセンターの立ち上げに奔走した。写真は、寝たきりになっている高齢者の家を訪問する協力隊時代の國谷さん。

協力隊後の生き方
～派遣国とかかわり続ける～



PROFILE

あさの・けんし
1990年生まれ。静岡県出身。大学卒業後、2015年7月に青年海外協力隊員としてルワンダに赴任。17年6月に帰国。18年、日本人を対象としたツアーコーディネーターや、現地の人を対象とした日本語教室の運営などを行う「YAMBI CONNECT LLC.」をルワンダに設立。

COMPANY PROFILE

YAMBI CONNECT LLC.

設立：2018年
社員数：4人
本社所在地：ルワンダ
事業内容：スタディツアーや視察ツアーなどのコーディネート、日本語教室の運営



case3 ビジネス × ルワンダ



スタディツアーに参加した日本の高校生たちと、視察の受け入れ先の1つとなった幼稚園の園児や教員たち

YAMBI CONNECT LLC. CEO

浅野拳史さん (ルワンダ・理科教育・2015年度1次隊)

ツアーコーディネートなどを行う
会社を現地に設立

協力隊時代、理科教育隊員としての活動のかたわら、他隊員の任地を精力的に回り、国内各地の情報や人脈を蓄えた浅野さん。任期終了後、それらを生かして日本人相手にツアーのコーディネートなどを行う会社を現地に設立。協力隊時代の教え子などと共に働いている。

「YAMBI CONNECT LLC. (以下、ヤンビー社)の事業の概要をお教えください。」
売り上げの面で事業の柱となっているのは、観光以外の目的でルワンダに来る日本人を対象としたツアーのコーディネートです。具体的には、高校生や大学生のスタディツアー、大学や企業による現地調査、CM撮影などについて、訪問先の選択、受け入れに関する訪問先との交渉や調整などを請け負っています。2018年の設立以来、およそ延べ100人の訪問客の受け入れをお手伝いしました。もう一つの事業として、規模は小さいのですが「日本語教室」の運営も行っています。コロナ禍以前は現地に物件を借りて10人ほどの生徒を対象に教室を開いていたのですが、コロナ禍に入ってから、日本からオンラインで生徒への授業を継続しています。

事業の実施体制は？

どのような事業を行うかは私自身が決め、その実務はルワンダ人と日本人のスタッフにお願いしています。ヤンビー社の立ち上げ以来、戦力となってもらっているルワンダ人は、協力隊時代に縁があった2人です。1人は私の教え子だった青年で、私の協力隊活動を何かと手伝ってくれ、信頼を置いていたことから、ツアーのコーディネートを請け負う際にも、お客様のアテンドなどを担当してもらっています。もう1人は、世界銀行の奨学金で日本に留学し、修士号も取得しているITエンジニア(以下、Aさん)です。協力隊時代に偶然の縁で友人となったのですが、ほかにITエンジニアと

しての仕事をこなすかたわら、ヤンビー社でツアーの企画、訪問先とのやりとり、会計などを担ってもらっています。日本語教室に関しては、コロナ禍以前はヤンビー社の趣旨に賛同してくれた協力隊経験者の女性に教員を務めてもらっていました。コロナ禍以降、彼女は日本で就職したので、替わって日本で日本語教育に携わっている男性にオンラインでの授業をお願いしています。スタッフには、それぞれの業務量に応じた賃金をお支払いしています。

私は当初、現地に張り付いていたのですが、静岡県の企業から「地域づくりの仕事を手伝ってほしい」と依頼を受けたため、19年からは両国に住まいを持ち、行き来しながら兼業しています。

「ヤンビー社設立に至った経緯をお教えください。」
帰国を迎える時期になり、Aさんを含め、「一緒に仕事をしよう」と言ってくる

れるルワンダ人の仲間がいたのが大きかったです。自分の力でお金を稼げるのは誰にとってもうれしいことだと思いますが、そんなうれしいことをルワンダの人たちとチームを組んでやっていくのは楽しそうだと思いき、現地で起業することにしました。私は協力隊時代にはかなり精力的に他隊員の任地を回り、ルワンダ各地の情報やルワンダ人との人脈を蓄えていたうえ、現地語の勉強も相当力を入れてきたので、そうした財産を活用できるものとして、まずはツアーのコーディネートから事業をスタートさせました。

「語学力や人脈以外に、協力隊経験で得たものが生きていると感じる点は？」
高校生のスタディツアーでは、ルワンダの良い面も悪い面も両方知ってもらえるプログラムになるよう努めているのですが、それは協力隊経験があるからこそその発想ではないかと思えます。私は

協力隊員として赴任した当初、人の目など気にせず自分がやりたいことを楽しむルワンダ人の姿に、「自分も見習いたい」と感銘することが多かったのですが、やがて活動や生活でかわりが密になるのに伴い、「約束を守らない」など、彼らに腹が立つことも多くなっていきました。そうしてルワンダ人の良い面も悪い面も両方知ったことで、それらと比較しながら日本を振り返ったときに、やはり日本の良い面と悪い面の両方を再認識することができた。そういう経験を日本の子どもたちにもさせてあげたいと思いで、ツアーを企画しています。

具体的には、5日ほどかけて現地の高校生たちと共に「劇」や「大きな絵」を制作するアクティビティをツアーに取り入れていきます。そうした「協働」を通して、「集合時間に遅れる」「これを準備しておく」という約束を破る」「ボールペンを盗む」といったルワンダの高校

生たちの「悪い面」が見えてくる。しかしその一方で、悩んでいるときに底抜けの明るさで「大丈夫だ」と励ましてくれるなど、彼らの「良い面」も実感できる。そのため、参加する日本の高校生たちにとっては、心が震えるような経験になっているようです。

「今後、ビジネスをどのような方向に展開していきたいと考えていますか。」
ツアーのコーディネートに関しては、ルワンダはアフリカのなかでも比較的安全な国なので、言わば「アフリカの入門編」として、日本の中学生や小学生などにもスタディツアーに参加してもらえようになればいいという思いがあります。一方、教育に関しては、「日本語」だけに留まらず、公用語だけれども苦手なルワンダ人も多い「英語」、さらには「プログラミング」など職につながる技能などへと、内容の幅を広げていければと考えています。



帰国後

上:日本語教室の様子。留学や仕事で日本語を使うために学びに来るケースが多いが、なかには「アニメおたく」もいる
下:日本語教室の生徒たちを集めて開いたカレーパーティー。普段は別々のコマで受講している生徒たちが交流できる機会として、こうしたイベントを時折開催している



協力隊

首都キガリ市にあるブサンザ小・中等学校に配属され、物理実験のサポート、英語教育、日本と交流するプログラムの実施などに取り組んだ。村落部には学校に通っていない子どもも多かったことから、そうした子どもたちに理科実験を体験してもらうため、配属先の教え子や他の協力隊員と共に村落部に赴くこともあった。写真は、配属先で静電気の実験を行ったときの様子。

協力隊後の生き方
～派遣国とかかわり続ける～



PROFILE

ふくしま ゆうこ
1990年生まれ、東京都出身。大学卒業後、小学校で教員として勤務。2014年10月、青年海外協力隊員としてバングラデシュに赴任。16年7月に帰国。17年1月、同国にあるコンサルティング会社「NewVision Solutions Ltd.」に就職。

COMPANY PROFILE

NewVision Solutions Ltd.

設立：2008年
社員数：23人
本社所在地：バングラデシュの首都ダッカ
事業内容：国内外の企業、公的機関などへのコンサルティング



case4 ビジネス × バングラデシュ



ニュービジョン社の同僚たちと。前列右端が福嶋さん

NewVision Solutions Ltd. 社員

福嶋祐子さん (バングラデシュ・小学校教育・2014年度2次隊)

現地のコンサルティング会社で、
日本企業の進出などをサポート

協力隊時代、初等教育の質向上の支援に取り組んだ福嶋さん。任期終了後は再び派遣国に赴き、現地のコンサルティング会社の社員として、日本の企業や公的機関を派遣国につなぐ事業に携わっている。

— NewVision Solutions Ltd. (以下、ニュービジョン社)の事業の概要をお教えください。

バングラデシュの首都ダッカにあるコンサルティング会社で、国内外の企業や公的機関から市場調査やビジネスサポートなどを請け負っています。二十数人いる社員のなかで日本人は私だけなのですが、当社を立ち上げた現会長が以前、日系企業の合併会社の社長を務めていたことから、日本の企業や公的機関からいただく仕事が多くを占めています。

— 福嶋さんは主にどのような業務を担当しているのでしょうか。

ビジネスサポートを行う部署に配属され、日本のクライアントの案件を担当しています。例えば、民間企業が自社製品を売るためにバングラデシュに法人を設立する場合には、事前の市場調査、現地で法人をつくるための法的な手続き、パートナーとする現地企業の信用調査などをお手伝いすることになります。市場調査や信用調査などはその専門性を持った社員に依頼することになるのですが、そこから上がってきた結果をもとに、バングラデシュに進出するとなった場合の可能性や課題を整理し、伝えるのが私の役割です。

— 派遣前の仕事も協力隊時代の活動も「教育分野」ですが、なぜコンサルティングの仕事を選んだのでしょうか。

協力隊の任期終盤、当時当社で働いていた日本人の方(以下、Aさん)に「入社しないか」と誘われたのがきっかけでした。私はそれまでの自分の協力隊活動について、「何でもしてあげたい」という思いが強いあまり、現地の人たちがこちらに依存するような関係性を築いてしまったという反省がありました。その償いの気持ちも込めて、帰国後は「支援する側とされる側」ではない、「対等の立場」でかかわりたいと考えるようになった。そのことをAさんにお話ししたところ、任期終了後にニュービジョン社で働くことを勧められました。幼い頃からの夢を叶えたいとの思いから、日本でまた教員として働くことも考えたのですが、母校の大学の理事長に「日本で教員になる人はいくらでもいるけれども、バングラデシュで思いを持って働けるのはあなたしかいない」と背中を押され、就職を決意するに至りました。

— 現地の人との関係性について、協力隊時代と異なると感じる点は？

同僚たちと私は、ニュービジョン社の事業を継続・発展させるという同じ目標に向け、同じ一社員として働く対等な

立場です。そのため、互いに「こうすべきではないか?」という意見をぶつけ合えば、自社製の食品をバングラデシュで売ることを考えている日系企業から「ヒットする可能性を知りたい」といった依頼を受けた際に、調査を依頼した同僚が「ほかの企業の同種の食品はこんなふう売られている」という結果を出してきた。そこで私は、「市場の新たな可能性がわかるよう、現地の人たちがどんな食品をどんな理由で選んでいるのか、具体的な消費行動を調査すべきではないか」と提案しました。それに対し、同僚はがんばって応えようとする。そうした双方のやり取りは、協力隊時代の同僚とはなかなか経験できなかったものであり、対等の立場にあるからこそ見せてもらえる素敵な姿だろうと感じています。

「現地の人が見ている世界」を見ようとする姿勢が協力隊時代にできていたことが、今の仕事で私の強みの一つになっている気がします。例えば、彼らは「この日までにこれをやる」といった「約束」を守らないことが多い。私は協力隊員として赴任した当初、「怠惰だ」と感じたのですが、彼らの話を聞くうちに、そうではないことがわかってきた。約束をした後に無い込んできたより優先すべき仕事に時間を割くなどしているのであり、「約束をした後に状況は変わるもの」「約束に必ずしも縛られるべきでない」と考えていることもあったのです。今の仕事で日系企業の方から「彼らは楽をしたいのですか?」と尋ねられることがあります。そうした場面では、「楽をしたいわけではない、一生懸命働いているうちに納期を過ぎてしまうことが一般的にあるのです」と説明する。その一方で、日系企業の方が迷惑することもわ

— 今後の抱負をお聞かせください。

バングラデシュは人口が日本よりも多く、その半分以上が25歳以下という若い国です。消費の面でも労働力の面でも、潜在力が高い。しかも、インドと中華人民共和国の間にあるという地理的条件から、両国と共に経済が発展することも期待されており、過去10年間の経済成長率は7パーセントを記録しています。また、独学で技術を身に付け、米国などからオフショア開発の仕事を受けているIT部門のフリーランサーが非常に多いなど、「たくましさ」も持っています。そうした国と日本を対等につなぐのには素敵だなと感じながら、コンサルティングの技術をさらに磨き、自分の業務の質を高めていきたいと考えています。



帰国後

上:日系企業が実施する現地市場調査をサポートする福嶋さん
下:福嶋さんはニュービジョン社の仕事のかたわら、バングラデシュ人がつくった「わらし」を日本で販売する日本の学生団体の活動にも協力している



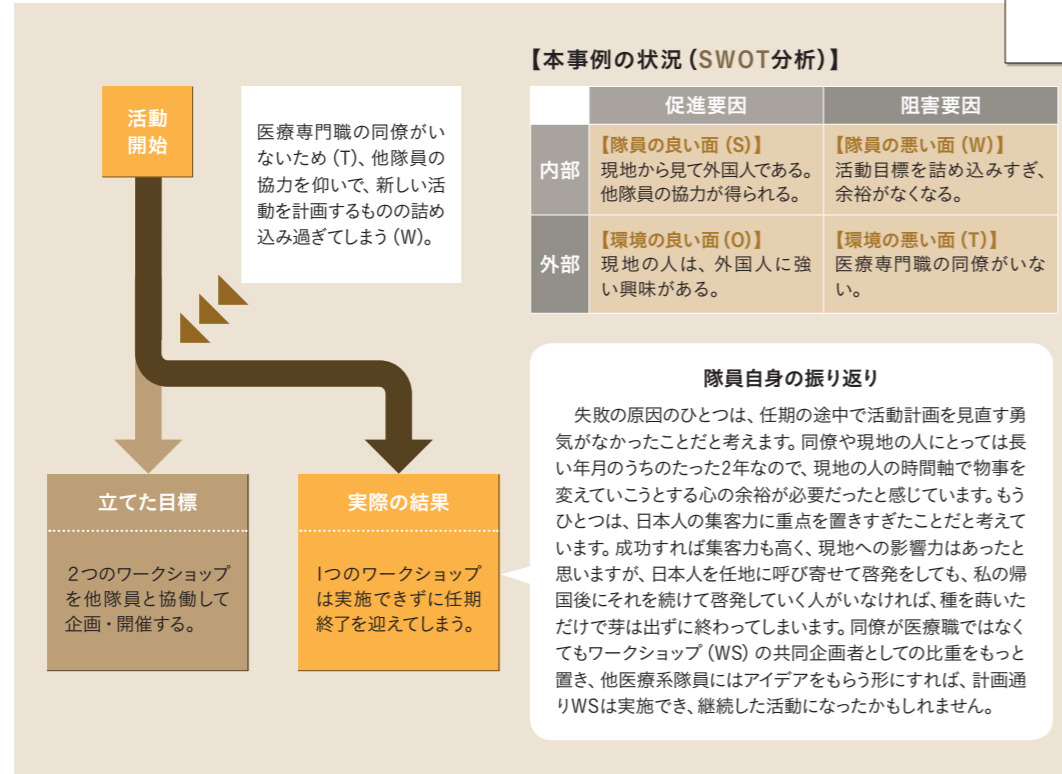
協力隊

福嶋さんは協力隊時代、政情不安により任期半ばで任地を変更。後半の活動先は、幼稚園から高校までを擁するNGO校で、初等教育部門の質向上に向けた活動に取り組んだ。写真は、活動先の学校で算数の授業を実践する福嶋さん。授業実践のほか、校内の美化の推進などにも取り組んだ。

“失敗”から 学ぶ #185



事例整理



他隊員の分析

専門性を問わず同僚をどんどん巻き込む

ご自身も振り返っているように、専門職でなくても企画の比重を同僚に置ければよかったですと考えます。私は赴任8カ月後から主活動の他に地方への啓蒙活動を日本人主体で開始しました。同僚は同行できませんでしたが、必ず巻き込みました。「語学力不足」を利用して自作資料の修正を依頼するという手段を使い、同僚・助手・総務など専門性を問わず多くの人にかかわってもらいました。その結果「地方授業はどうだった？」など興味を持ってくれ、専門性がない人へも啓蒙でき、多視点からの意見ももらえ、新たな活動が開始。定着につながりました。

文＝協力隊経験者

- 中南米・理学療法士・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

診療所のリハビリテーション室で同僚への指導を実施した。また、側弯症が多かったため、同僚と原因を考え、乳児期からの正常発達の啓蒙活動を実施。診療所内や、医療機関が少ない地方でさまざまな職種の養成校で出張授業を行った。

伝達方法の多様性

ワークショップ (WS) などのイベント規模の集客が必要となる活動は、現地のインフラ状況や国民性など多くのリスクファクターが生じてしまいます。計画の段階で同じWS内容に対して、「①1人で開催パターン、②隊員同士協働パターン、③現地の方との協働パターン」を用意しておくのも1つの手ではないでしょうか。配信活動・啓蒙活動を目的としているのであれば、WSの動画などをFacebookなどのSNSや配属先のウェブサイトアップすることや、ポスター作成をして活動していくことも組み込むことができれば良かったと考えます。

文＝協力隊経験者

- アジア・作業療法士・2016年度派遣
- 取り組んだ活動

リハビリテーション病院に配属され、主に脳卒中・整形疾患患者の治療、同僚への技術指導、体の模型や治療器具、自助具の製作などの活動に従事した。予防医療に対する啓蒙活動としてSNS等を利用して配信活動も行った。

計画に対するリスク管理が不足し、 予定していた活動を実施できなかった

文＝村田真奈美さん (ソロモン・理学療法士・2017年度3次隊)

私の任地は僻地にあるテモツ州で、隊員の派遣は約20年振り、かつ日本人以外の外国人が住んでいない外国人慣れをしていない地域でした。赴任と同時に一瞬で州の有名人となり、活動でコミュニケーションを巡回するといつも周りに現地の人々が集まってくる状態でした。また、リハビリテーションの概念がほぼ根づいていない地域で一から活動を開始しました。

このような背景もあり、要請内容の「①理学療法部門の運営、②CBR部門の業務援助、③同僚への知識・技術の伝達」の実施だけでも手一杯だったのですが、赴任後約半年間で現地を観察する中で、腰痛や膝関節痛、生活習慣病に悩まされる人が多いことにも気付きました。2年という限られた時間の中で精一杯活動したいという気持ちもあり、この2点に対する予防のワークショップ (以下、WS) も活動計画に組み込みました。

2つのWSは、現地の人々の「日本人に対する興味の強さ＝集客力」を生かして、同僚の協力も得ながら、同国の医療系隊員を私の任地に呼び寄せるかたちで協働して行う計画を立てました。同僚は医療専門職ではなかったため、企画は主

に隊員同士で立てました。赴任から1年4カ月後に、1つ目の「腰痛・膝関節痛予防のWS」を開催。そして、「生活習慣病予防のWS」は、赴任から1年8カ月を目安に、首都で活動する看護師隊員と協働で開催することを計画していましたが、計画通りに開催できないまま、任期終了を迎えてしまいました。

その理由の1つは、任地への移動手段の少なさにあります。首都から任地への主な移動手段は週2回の小型飛行機で、天候や燃料不足によって飛ばないこともあります。不運にもWSの時期に燃料が底を尽き、3週間程飛行機が飛ばない事態が起こってしまったのです。

その結果、共同企画者である隊員が首都から私の任地に来られず、また計画を任期後半に設定していたため振り替えの日程も立てられず、計画した通りのWSは開催できないまま、任期を終えました。移動のリスクを考え、計画を見直せたら、隊員を呼ぶことに注力しすぎず、企画の比重を同僚に置くことも考えたはずですが、当時は活動目標の達成に意識が向き、それらを考える余裕がなかったことが失敗の原因だと思っています。



腰痛や膝関節痛で生活に制限を来す人が多いことに気づいた村田さんは、他任地の理学療法士隊員と協働して現地の人に向けて「腰痛・膝関節痛予防のワークショップ」を実施した



PROFILE

1987年生まれ、北海道出身。2010年、北海道文教大学理学療法学科を卒業後、神奈川県総合病院と東京都訪問看護ステーションにて、理学療法士として合計7年半従事。18年1月、青年海外協力隊員としてソロモンに赴任。20年1月、帰国。現在は、東京都内の訪問看護ステーションにて在宅リハビリテーションに従事している。

活動概要

- ソロモンのテモツ州のラタ病院 CBR部門に配属され、以下の活動を行った。
- 院内に理学療法部門を立ち上げ、入院・外来患者に対する理学療法を実施
- CBR部門の同僚と共に州内の村を巡回し、障がい者や高齢者に対するリハビリテーション支援の実施 など

* CBR…「Community Based Rehabilitation (地域に根ざしたリハビリテーション)」の略。施設の中だけでなく、地域社会とのかかわりのなかで行われるリハビリ。

派遣人数は少ないもの
いぶし銀の活躍をする
職種の事例をピックアップ

#G136

自転車競技

派遣中 ▶ 0人

累計 ▶ 3人

分類 ▶ 人的資源

活動例 ▶ 競技選手への直接指導や指導者への講習会の開催 など

類似職種 ▶ -

※人数は、2020年8月31日現在。



青年男子チームに指導する渡邊さん。担当する選手たちは英語ではなく現地語のティグライ語を話すため、活動当初はコミュニケーションの問題があった。渡邊さんは現地語を勉強し、この問題を解決した

#C402

養殖

派遣中 ▶ 1人

累計 ▶ 27人

分類 ▶ 農林水産

活動例 ▶ 水産局や養殖センターにおける養殖技術の向上支援 など

類似職種 ▶ 水産開発

※人数は、2020年8月31日現在。



現地漁業者の協力のもと、同僚と稚魚の餌になるプランクトン採取する佐々木さん。配属先の大学はコロンビアで唯一水産学科のある大学であり、養殖技術開発の研究に積極的に取り組んでいる

PROFILE

1993年生まれ、静岡県出身。中学2年生で自転車競技を始め、全国大会などに複数回出場。静岡産業大学経営学部スポーツ経営学科を卒業後、スポーツトレーナーとして活動を開始。2017年10月、青年海外協力隊員としてエチオピアに赴任。貧困を目の当たりにして国際協力の道を志し、現在は外務省の草の根・人間の安全保障無償資金協力外部委員として在外公館との委嘱契約締結後、日本でテレワーク中。パーソナルトレーナーの認定資格(全米NSCA認定ストレングス&コンディショニングスペシャリスト)を持つ。

活動概要

エチオピアの政府管轄スポーツオフィスにて、主に下記の活動を行った。
●若手選手に対するロードレース、タイムトライアルの実践的な指導
●同僚トレーナーに対する知識の共有、育成支援
●関係者に対する障害予防や応急処置に係るセミナーの開催



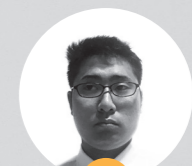
渡邊大貴さん
(エチオピア・2017年度2次隊)

PROFILE

1991年生まれ、神奈川県出身。2017年3月、鹿児島大学大学院水産学研究所を修了し、同年6月に青年海外協力隊員としてコロンビアに赴任。19年6月、帰国。同年10月からインテムコンサルティング株式会社に入社。開発コンサルタントとして水産に関する国際開発や、国内補助金事業等に携わっている。

活動概要

コロンビアのマグダレナ県サンタマルタ市にある大学に配属され、海産魚類養殖技術開発を目指し、主に以下の活動を行った。
●稚魚の餌づくり(プランクトン培養)
●湖で採取したプランクトンの観察や培養
●現地学生や教授と共に培養した餌を用いた魚の試験飼育 など



佐々木拓さん
(コロンビア・2017年度1次隊)

1つ目は必要機材が十分に揃っていないことです。経済的な事情で必要最低限の機材が足りない上に、事故につながるリスク(整備不良の状態、ブレーキがあまり効かない、ヘルメットがない、タイヤの摩耗など)についての十分な認識がないまま過酷なトレーニングをしている選手が多かったです。

Q 活動の最大の困難は?

2つ目は追走用の車両がなかったことです。長距離トレーニングなどでは、車やバイクを使って選手を追いかけ練習の指示を出すのが一般的です。しかし、資金不足で車両がないため追走して練習を監督することができませんでした。

Q どう解決しましたか?

まずは自転車を整備することに努めました。使える部品を集めてレース用の自転車と練習用の自転車をつくりました。日本の自転車競技チームに連絡を取り、余った機材を供与していただくこともありました(※)。

Q 同職種の後輩隊員にメッセージをお願いします。

自転車競技は転倒すると重傷を負うスポーツです。選手が使う機材や道路などの環境を重点的にチェックしてリスク管理に努めることが、活動で最も重要なことだと思います。安全を第一に考え、科学的な根拠に基づいた実践的なトレーニングプログラムを提供できるように努めましょう。

※日本競輪選手会静岡支部と静岡県島田市にある自転車屋なるおかサイクルからは多数の寄付をいただきました。

Q メインの活動は?

私はコロンビア国内で唯一水産学科を抱えるマグダレナ大学に派遣されました。2015年に始まった鹿児島大学とJICAの大学連携事業の一環で、私は当大学の水産学科にある養殖技術開発研究室で活動を行いました。この研究室では魚を卵から成体まで育てた後、再び産卵させる「魚類の再生産技術の開発」を目的とした研究を行っています。魚類の再生産のためには、死亡率の最も高い稚魚期の飼育管理が特に重要です。そのため、稚魚の餌であるプランクトンの採取や最適な培養方法の模索、学生を対象としたプランクトンの培養方法に関する実習などを行い、飼育管理技術の向上を目指しました。また学生と一緒に培養した餌を用いて、試験的に熱帯魚の稚魚等も飼育しました。

Q 活動の最大の困難は?

現地の方との時間の調整です。国際協力の観点からも、隊員と現地パートナーと一緒に活動を行うことが望ましいですが、私の主たるパートナーである学生は自身の卒業研究や授業で忙しい、餌の培養等に参加してもらうことが困難でした。結果として活動1年目は、私1人で活動を進めてしまい、私の心の中に葛藤が生まれました。現地学生や教授からも稚魚飼育、餌培養等は私専用のプロジェクトであると認識さ

Q メインの活動は?

実践的な練習方法を知らない監督が多いようでした。そこで私の自転車競技経験とトレーナーとして培ったスキルを生かし、実践的で理論的なトレーニング計画を作成し、提供しました。約20人の青年男子チームや約7人の女子チームなど、監督するチームが頻繁に変わることがありました。そのたびに全選手と同僚を集めてオリエンテーションを開催し、練習場所、集合時間などから決めていきました。選手や同僚と信頼関係を築くために、コーヒーをただ一緒に飲みに行くことなどもたくさんありました。

Q どう解決しましたか?

現地の方を頼り、積極的にヘルプを出すことにしました。2年目には語学にも慣れ、学生とコミュニケーションが取りやすくなっていったので、積極的に「手伝って」と伝えることで、作業を一緒に行えるようになりました。学生にも当事者意識が芽生え、稚魚飼育のための現地資料などを収集してくれたり、主体となってプランクトンを培養するための装置を作成してくれたりもするようになりました。

Q 派遣予定の同職種の隊員にメッセージをお願いします。

自然相手の職種ということで思ったような成果はなかなか出ないかもしれませんが、ただ自然好きの人にとってみれば、日本では飼育できない魚が飼育できたり、餌として有用なプランクトンを探したりできるチャンスでもあります。発見したことや興味を持ったことを、現地の人に情熱を持って説明すれば、現地の人もその内容に興味を持ってくれます。私自身もそこから新たな活動につながることがありました。もし、この職種で活動することがあれば、現地の人と自然に積極的に向かい合い、充実した活動・生活をしていただけたらと思います。

活動に役立つアイデア

収入向上活動②

ナビゲーター = 高橋将太さん
(ガーナ・コミュニティ開発・2017年度4次隊)

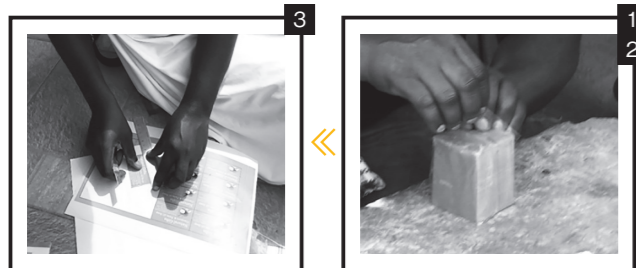
石けんのマーケティング

前号でご紹介した「石けんの
つくり方」でつくった石けんを、
現地で販売した方法についてご
紹介します。



石けんの包装

ガーナで手に入れやすかった透明なビニール袋 (B6サイズ)
とセロハンテープを使用し、石けんを包装しました。私の任地
や私が行ったことのある地方のマーケットには、丁寧に包まれ
た個包装の石けんが少なかったため、販売の際の特徴にもなる
と思いました。



③最後に、石けんの名前を印刷したステッカーを貼ったら完成です。ステッカーも適切なサイズで販売していませんので、大きな用紙に印刷し、カッターと定規で1枚ずつ、丁寧に切り出してつくりました。石けんの名前はコミュニティメンバーと相談して、「Natural Gifts」としました。

①まず、切り出した石けんをビニール袋に丁寧にに入れて、ビニールの余分な部分はハサミでカットします。
②その次に、石けんがビニール袋でピッタリと包まれるように、セロハンテープで留めていきます。この時に、空気が入ったり、袋が余ったりしたりしないようにテープで留めるときれいに見えます。

石けんの販売

販売のポイントは、石けんの使い心地の良さなど、他の石けんとの違いをいかにして感じさせることができるかです。いきなりマーケットで販売しても売れません。

そこで、まずは近所のママやマーケットレディ (市場で物売りをする女性)、小学校の手洗い用などに無料で配布し、トライアルしてもらいました。使ってもらったうえで、泡立ちが良かったり、サイズが良かったりと感じてもらうようにしました。

同時に、改善して欲しいポイント (形や香料) もヒアリングして、修正し、再度トライアルしてもらいました。こうした活動をしていると口コミで広がり、買ってくれる人やつくり方を知りたい人など興味関心をもってくれる人が増えました。

活動に役立つアイデア

論理的思考の向上 『囲碁入門』

ナビゲーター = 内田佳秀さん
(セントルシア・PCインストラクター・2016年度4次隊)

囲碁教室の始め方

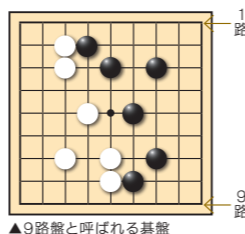
任期後半、セカンダリースクールのIT科の生徒たちの物事を順序立てて考える力、論理的思考力を鍛えられないかと考え、学校の放課後に囲碁教室を開催することにしました。囲碁には、「ここに石を置いたら、次に相手はこんな手を指してくる」という順序を立てて考える力が必要です。囲碁教室は、「囲碁の歴史」文化の紹介」「ルール紹介」「対局」の構成で開催しました。

① 囲碁の歴史、文化の紹介

囲碁の歴史や文化、囲碁の教育現場の導入事例について、スライドを用い紹介しました。派遣国はドミノやチェスなどボードゲームを楽しむ文化があったので生徒だけでなく、先生も囲碁に興味を持ってきてくれたり協力的でした。

② 囲碁のルール紹介

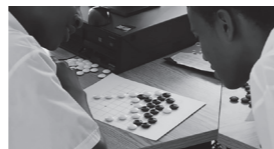
YouTubeの動画を見てもらいました。囲碁は世界の多くの国で遊ばれているため、さまざまな言語で入門者向けの動画がアップされています。例えばYouTubeで「how to play go」や「como jugar go」で検索すると英語やスペイン語でのルール説明の動画が見つかります。



③ 対局

対局には碁盤と碁石を使います。碁盤は通常は19路×19路のサイズが使われますが、入門者には大きすぎると決着に時間がかかりすぎるため、囲碁教室では9路×9路の9路盤と呼ばれる碁盤で対局してもらいました。碁石は日本で買ったものを持っていきましたが、段ボールや厚紙に白と黒の色を塗って切り抜いてつくることができます (碁石は9路盤だと各40個)。碁盤はコピー用紙にマス目を印刷したものを使いました。9路盤はA4サイズに収まるので扱いやすいです。7路盤でも手始めには十分かと思えます。

囲碁教室は実際には4、5回くらいしか実施できませんでしたが、勝った生徒が「どう? うまいでしょ!」とアピールしてきたり、負けた生徒は悔しがって友達に戦いを挑んだり楽しみながら打っていて、思考力を鍛える刺激になったのではないかと思います。



対局する生徒たち。覚えていても2、3回対局すると形になってきます

知ったク情報

改善の方法②

ナビゲーター = 武藤 正さん (シニア海外ボランティア/
ベトナム・品質管理・生産性向上・2016年度4次隊)
※派遣名称は派遣当時のものです。

見える化

今回は、「トヨタ生産方式 (生産ラインのムダを徹底的に排除する生産方式)」で使われている「見える化」を紹介します。

「見える化」とは「目で見える管理」です。必要な情報を必要な場所ですぐに見えるようにし、異常や問題に早く気づき、問題を解決し、再発防止対策ができるようにすることです。誰もが目で見てわかるように写真やグラフ、表などを作成、必要な場所に掲示し管理することが「見える化」です。

ここでは、5つの事例を紹介します。参考にして皆さんの職場や今後の活動などに導入し、活用してみてください。

① 場所の見える化

収納場所に収納物の影を書くことで決められた場所に返却しやすくし、物を探す無駄な時間をなくす。



文具の整理整頓 (武藤さんの引き出し)

机の引き出しと同じ大きさの段ボールを用意し、収納物の外形を切り抜いて、収納物を各位置に収納しました。工場では工具板に各工具の影を書いて位置を示すと工具が返却しやすくなります。

② 状態の見える化

あるべき状態の写真を掲示し、日々の現状と比較し管理することにより、良好な状態を維持し、仕事の作業性を向上させる。

<出荷製品保管エリアの整頓状況チェック/ 8月>

点検日	1	2	3	4	5	6	29	30	31
ゴミが落ちていない	○	○	○	○	○	○	○	○	○
製品が整頓されている	○	△	○	○	○	○	△	○	○
パレットが整理されている	○	○	×	○	○	○	○	○	○
気づき			定位置に置かれていない						



管理責任者: 武藤

出荷製品保管エリア/良好状態



私は活動中、ベトナムで工業用プラスチック袋を製造している会社へ改善指導を行っていたので、製造工場で上記のような整頓状況チェック表を取り入れ、作業性を向上することができました。

③ 能力の見える化

技能を基準化し、図表化する。自己の学習計画、部署の教育計画に反映させ、能力向上を図る。

<スキルマップ 2020年 QC検査工程>

氏名	外観検査	電気検査	成分検査	〇〇検査	レベル	備考
Aさん	1/2 3/4	1/2 3/4	1/2 3/4	1/2 3/4	レベル1	監督者の下で指導が必要
Bさん	1/2 3/4	1/2 3/4	1/2 3/4	1/2 3/4	レベル2	指導または手順書が必要
Cさん	1/2 3/4	1/2 3/4	1/2 3/4	1/2 3/4	レベル3	自分ひとりでできる
					レベル4	他人を教えることができる

現地の水利管理会社では、「事務管理技能」見える化しました。

④ 成果の見える化

工場で時間毎の生産数量を表に記入し、計画数量を管理。異常を早期に発見・対処して計画通りの製造を行うことができるようにする。

<生産量管理表 製造日: 2020年8月16日>

時刻	実生産量 個/時間	管理範囲 355~365個/時間	計画との差異 個/時間	対処方法
8:00	360	○	0	
9:00	362	○	+2	
10:00	356	○	-4	
11:00	345	×	-15	ベルトコンベアの速度を上げる
12:00	365	○	+5	
13:00				
14:00				

現地のプラスチック部品工場では、この管理表を導入したので安定した製造工程になりました。

⑤ 時間の見える化

計画を作成し、時間軸を表示する。計画の達成状況が明確になり遅延がなくなる。

<2020年/ 3S (整理・清掃・整頓) 導入計画> (5月15日時点)

項目	担当者	1月	2月	3月	4月	5月	6月
整理	不用品の選定	計画	結果	済			
	不用品の廃棄	計画	結果	済			
清掃	清掃道具の準備	計画	結果	済			
	清掃活動	計画	結果	済	実行中		
整頓	場所・設備選定	計画	結果	済			
	整頓の実行	計画	結果	済	実行中 (80%)		

現地の魚加工工場では、3Sの導入時にこの計画表を使ったので期限までに遅延なく導入できました。



Vol.181

JICA Volunteers!
before ▶ after 人生を変えた2年間

before
大学生

after
水処理施設の運転管理者



河川の水質をチェックする現在の宮さん。水の量や濁りなどを確認し、水処理を行う際の薬品の量や、水処理をする水量などを決める目安のひとつにする。たとえば、台風が来ると水が濁り、使う薬品の量が変わる

2016 2014 1992

after	JICA Volunteer	before
7月、帰国。 総合水事業会社「水ing株式会社」に入社。水処理施設の維持管理業務に携わる。	7月、青年海外協力隊に参加。エクアドルのグアモテ地域にある市役所に配属され、廃棄物処理の問題解決と、市民や小中学校の児童・生徒に対し環境教育を行う。	3月、鳥取環境大学環境情報学部環境マネジメント学科卒業。 新潟県出身。

隊員として生活する中で、現地の水が直接飲めないことを非常に辛く感じた。いつか現地の水問題を解決したいと、水関連の企業に入社。

環境問題のどの分野で仕事をするのが悩み、現場での経験が必要だと考えた。そこで、現場で活動できる協力隊に参加を決めた。

水ing (スイング) 株式会社

設立: 1912年
本社住所: 東京都港区港南1-7-18
A-PLACE 品川東
従業員数: 4700人 (2019年4月)
※国内外子会社含む
事業内容: 水処理施設の設計・施工・マネジメント など
URL: <https://www.swing-w.com/>

水・大気・廃棄物……環境問題のどの分野を専門にしようか迷っていた大学時代の宮さんは、環境問題の現場を見るために協力隊に参加した。現地で水が直接飲めない辛さを味わったことで、帰国後は水処理分野に進み、現在は水処理施設で技術者として働いている。

現場で教えられた自身の進路

新潟県小千谷市。山に囲まれた自然が溢れる街で宮さんは育った。キャンプや山遊びが好きだった少年は、木が伐採されたり、海に重油が流れたりするニュースを見て、環境問題に関心をもち、それらを学ぶため大学に進学。大学卒業後は、環境問題にかかわる仕事に就きたいと思っていたが、環境問題には酸性雨や熱帯雨林減少、海洋汚染などの分野がある。どの分野に取り組んでも問題解決につながる一方、自分の専門を何にしたらよいか悩んだ。「現場を見て、今後の進路を考えた。以前大学に協力隊OBが出前講座に来てくれたことがあり、環境教育の活動があることは知っていた。そこで、協力隊への参加を決め、受験。環境教育隊員としてエクアドルに派遣されることが決まった。

水と環境を技術で支える

エクアドル・環境教育・2014年度1次隊

宮隆彰さん



エクアドルで協力隊員として活動する宮さん。現地の人に対して高倉式コンポストの普及活動を行った

来世界が抱える水分野の環境問題を解決する糸口になるかもしれない……帰国後、自分がやるべきことが見えてきた気がした。

水分野から環境問題に取り組む

「環境」「水」とネットで検索してヒットした企業のひとつが現在勤める会社でした。水処理の技術者になれると思ひ、応募しました。2016年の7月に帰国し、11月に総合水事業会社の水ing株式会社に入社。同社は、国内外の水処理施設の設計・施工・運転管理などを行っており、海外でも様々な地域の水に関する課題を解決する水処理施設を建設に関し多くの実績がある。

宮さんの仕事は、国内にある浄水場や下水処理場などの施設の運転管理。水処理の施設は24時間稼働させるため、勤務は日勤と夜勤の交替制だ。業務内容は、浄水場であれば、河川などの水源から取水し、水の量と状態に合わせて薬品を混ぜ、処理をしてきれいな水に

活動地域は標高3000メートルの場所にあるエクアドルの街、グアモテ。同地は、廃棄物処理に問題があり、その改善が必要とされていた。廃棄物処理場にはゴミが溢れ、野犬やハエが発生し、公衆衛生の問題があった。廃棄物の8割は生ゴミと知った宮さんは「高倉式コンポスト」の普及による生ゴミの削減と、環境教育活動に取り組むことになった。他地域の環境教育隊員との連携もあり、どちらの活動も2年間である程度まで形にすることができたという。そして活動を通して宮さんは技術の重要性を学んだ。

「実務経験のない私が現地ですることには少ない。現地のために何かできたのは高倉式コンポストの技術を日本から持っていったからでした。技術移転で状況の改善ができると実感できたので、帰国後は、技術を身につけられる仕事に就こうと決意しました」

仕事選びのもうひとつのきっかけとなったのが水だ。現地の水道水は寄生虫が混入しているため、必ず煮沸して飲む。現地の人に「日本では蛇口から出る水はそのまま飲める」と伝えたとき「日本の技術はすごいね」と驚かれた。水道水をそのまま飲める国は世界でも少ない。日本の技術を獲得すれば、将

した後、水道管に送る。施設ではポンプや送風機、発電機など多くの機械、また水の状態などを検査するために多くの計器を使い、水や施設の状態に、異常がないかを確認している。仕事を始めて4年。日々の業務に加え、水質、機械、電気に関する資格も取得し、技術者として着実にステップアップしている宮さん。自身も日常生活で使用する水というインフラを守れていることにやりがいを感じているという。運転管理の仕事は、施設と会社との契約が決まるため、契約によって勤務する施設が変わる。現在、宮さんは国内の浄水場に勤務しているが、これが4つ目の施設だ。

「人も、施設の特長も、水質も場所によって異なりますが、そのような環境で働くことに無理なく適応できるのは、協力隊の経験があったからだと感じています」

エクアドルでは高地にいた影響で、消化不良になり、満足な睡眠がとれず、10キロ痩せたという。現地の人から食材の調理方法や高山病の対応法を聞き、生活に取り入れた。「半分くらいは効果がなかったんですけど」と笑って話すが、現地の人がやっていることを素直に取り入れることで、適応し、乗り越えられるものがあるということを感じてきた。

「施設でも着任したての期間は、人の方法を学び、覚えることを大切にしています」

いずれは水処理に関連する改善の提案もしたいと宮さんは話す。例えば、浄水に使用するエネルギー量を減らせるポンプ稼働の方法が提案できれば、それはエネルギー問題の解決にもつながるからだ。

「水処理分野の一流の技術者になって、環境問題の解決に貢献したいと思っています」

*高倉式コンポスト…J-POWERグループ株式会社ジェイベックの高倉弘二氏が開発したコンポスト化手法のひとつで、特定の発酵菌ではなく、現地で入手できる発酵菌を利用し、有機ゴミを分解する。

よもぎま話

「日本社会への復帰」や「進路開拓」、「協力隊経験の生かし方」など、協力隊員の「帰国後」について、O・B・O・Gに語り合ってもらいます。



Cさん(女性)

【派遣前】ソフトボール選手
【協力隊】▶退職参加
▶ソフトボール・アフリカ・2016年度派遣
▶ソフトボールの普及やナショナルチームの指導などに従事。
【現在】日本女子ソフトボールリーグのチームの通訳者

Bさん(男性)

【派遣前】学生
【協力隊】▶新卒参加
▶ラグビー・アジア・2016年度派遣
▶中等学校でのラグビー指導などに従事。
【現在】高校の社会科教員

Aさん(男性)

【派遣前】フィットネスジムのトレーナー
【協力隊】▶退職参加
▶陸上競技・中南米・2015年度派遣
▶陸上競技の指導・普及や運動教室の運営などに従事。
【現在】パーソナルトレーニングのジムを運営

帰国後の進路開拓

A 私は小学生のときに陸上競技を始め、主にハードル走や短距離走の選手として競技を続けてきました。大学を卒業した後、米国の機関が認定するアスリート対象のトレーナーの資格を取得し、フィットネスジムでトレーナーとして働いてから協力隊に参加しました。協力隊では、主に陸上競技の指導や普及に取り組みました。帰国後は、出張型でパーソナルトレーニングや陸上競技指導を行うジムを日本で立ち上げ、運営しています。私自身も陸上競技は続けています。

B 私も小学生のときにラグビーを始め、大学まで競技を続けた後、新卒で協力隊に参加しました。協力隊時代は主に学校を巡回してラグビーの指導をする活動に取り組みました。帰国後は、ラグビーの競技連盟の国際協力部門で1年間働いた後、今年度から私立高校の社会科教員となり、そこでラグビー部の顧問も務めています。

C 私は中学生のときに部活でソフトボールを始め、大学を卒業した後も通算で9年ほど日本女子ソフトボールリーグのチームの選手として競技を続けた後、協力隊に参加しました。協力隊では、ソフトボールの普及やナショナルチームの指導などに携わりました。現在は、外国人選手がいる日本女子ソフトボールリーグのチームで英語の通訳者を務めています。

A 私がジムを立ち上げようと思ったのは帰国前でした。任期中、陸上競技に関する活動のかたわらで、トレーナーの資格を生かして肥満対策の運動教室も運営したのですが、「肥満で悩んでいるけれども、教室に通ってフィットネストレーニングを続けるのはしんどい」

という方も多かったことから、「出張型」の運動指導も取り入れられました。すると予想以上に多くの依頼をいただき、同様のニーズは日本でもあるはずだと考え、現在運営するジムのアイデアを思いついたのです。お2人も帰国前に進路の見直しをつけていたのでしょうか。

B 教員になることは派遣前から決めており、協力隊に参加したのも、社会科の教員、あるいはラグビー部の顧問として働くうえで有益な経験になると考えたからです。帰国が教員採用試験の終わる時期だったので、受験は翌年になってしまったのですが、その年は日本でラグビーのワールドカップが開かれた年であり、競技連盟で関連事業を担当する1年契約のポストに誘っていただいたので、働きながら教員採用試験の準備をすることにしました。

C 協力隊の任期を終えた後、いずれアフリカで本格的にソフトボールの普及に取り組みたいという漠然とした希望はあったのですが、具体的な計画は何もない状態で帰国しました。通訳の仕事に就いたのは、私が現在勤めているチームでかつて通訳をされていた知り合いの方に誘われたのがきっかけです。強豪チームなので、たいした英語力もない私では迷惑をかけてしまうと思い、いったんはお断りしたのですが、チームの方から「英語はある程度できれば良い。ソフトボールを理解していることや、空気が読めることが重要だ」と強く勧められ、お引き受けすることにしました。ここで学べることは、アフリカでソフトボールの普及に取り組む際も役立つはずとの考えもありました。

「スポーツ」の見方の変化

A 私は派遣国の陸上競技選手たちを見て、日本の選手たちとの一番の違いだと感じる点ができていないから、日本人選手からの批判をそのまま伝えたら沈んでしまうだろう」といった配慮をするよう心がけています。

今後のプラン

A コロナ禍になってから初めてSNSでトレーニングの方法を紹介する動画を公開するようになったのですが、それにより、海外のトレーナーやスポーツ選手とのつながりもでき、SNSの力を実感しています。そこで今後は、海外を含むさまざまな地域の方々オンラインでトレーニングに関するサービスを提供していくことができればと考えています。

B ラグビーではこれまで大洋州の国々から多くの選手を日本は受け入れてきたので、おそらくほかの競技と比べると、途上国からのラグビー留学を受け入れる素地ができているかと思っています。そうしたことから、私は今後、教員としての仕事のかたわらで、派遣国の選手のラグビー留学を後押ししてみたいという希望があります。そこでは、競技連盟の仕事で得た人脈も活用できるのではと思っています。

C 今の通訳の仕事は1年ごとに契約更新があるので、勉強にもなり、やりがいも大きいので、何年続けられるか、続けるべきかはしばしば考えます。また、英語力もつと磨き、次につなげたいとも思っています。一方、Bさんと同じく、アフリカのソフトボール選手の来日を支援したいという気持ちもあります。1人でも2人でも日本のレベルを体感したり、日本の選手たちの練習や生活の様子を知ったりすれば、母国のソフトボール界にとって大きな財産になるからです。実際、私は実業団チームで働いているので、そのつながりを頼って受け入れのチャンスがうかがってまいります。

じたのは、陸上競技をとっても楽しんでいる点です。大会があるときなどは、それに向けてわくわくしながら練習に取り組み。一方、日本の中学校や高校の部活などでは、きつい練習を我慢することを強いられているような雰囲気があるのが一般的かと思っています。そうして、楽しみながら取り組むのがスポーツの本来あるべき姿だと感じたため、協力隊時代に肥満対策の運動指導を行った際も、いかに楽しんでもらうかを重視しました。例えば、対象者がそれぞれどのようなトレーニングが好きなのかを、与えた課題に取り組み様子から見極め、それを中心とする個別のメニューをつくる。すると、任期中に約100人がトレーニングを継続し、平均で2キログラム近くの体重減が叶いました。そうした経験があるので、現在の仕事でも同じように、「バランスボール」や「ウエイトトレーニング」など、お客様の好みがどのようなトレーニング方法にあるのかを見極めたうえで、好みの方法を中心とする個別のメニューをつくり、指導しています。このやり方は実際に有効なようで、ほとんどの方がトレーニングをしっかりと継続される。そのため、現在は新規の入会が2カ月待ちという状況になっています。

B 私も協力隊時代にAさんがお話しされたのと同じことを感じました。私は中学時代、学校にラグビー部がなかったので、地域のクラブでラグビーをし、学校では陸上競技部に入っていました。そこではやはり、きつい練習を我慢することが大事だという考えが顧問の先生にあり、楽しみは少なかったです。それでも、部活に入らないのは良くないという意識から、辞めるという選択も頭にありませんでした。一方、派遣国の子どもたちは、娯楽が少なくないというのがあると思います。スポーツを楽しんでやっていたと思います。楽しみながら練習に取り組

みつつ、競技力の伸びも目指す。競技力が伸びると、さらに上を目指して練習の方法を自発的に改善するようになり、練習の楽しみも増します。スポーツの本質はそういう点にあるのだらうと思うようになったことから、現在はラグビー部の顧問として、「今日も練習か。嫌だな」と思う部員が出ないよう、メニューの工夫などを心がけています。派遣国でラグビーを教えた子どもたちは、つまらない練習をするとすぐに来なくなってしまうため、常に楽しめる練習メニューを考えるようにしていたので、そこで貯めた引き出しが今の財産になっています。

C 「スポーツにおける我慢」という点については、私は通訳者としての仕事のなかで、日本人選手と外国人選手の間意識のギャップを感じています。日本ではチームごとに、「みっともないので、疲れたから」といって練習後にグラウンドに寝そべらない」など、禁止事項があれこれ決まっています。外国人選手のなかには、我慢ばかりだとストレスで嫌になる人もいるのですが、日本人選手からすれば、子どもころから守ってきて当たり前となっているようなルールばかりであり、それに違反することを良くは思わない。私は両者の間に立ち、それぞれの考えを角が立たないように他方に伝えなければなりません。私はアフリカのスポーツ選手を見てきたので、外国人選手が「我慢」について違和感を覚える感覚もわかりますし、協力隊時代、現地社会のマイノリティーとして生きる私を現地の人たちはいつでも受け入れ、支えてくれました。そういう経験をしているので、チームのマイノリティーである外国人選手がどのような気持ちにあり、日本人はどのような支えをすべきなのか、見当がつかず。そのため、今は私が率先して外国人選手たちの心に耳を傾け、「今、この選手は思うような成績を上げ

協力隊ネパール会

会の目的

JICA海外協力隊員としてネパールに派遣された者相互の親睦、およびネパールにかかわりがある方々との親睦を図り、ネパールにおける協力隊事業の側面的援助・参加を通じ、日本・ネパール両国の親善に寄与する。



協力隊ネパール会の会員(前列左端と後列左から3人目)が引率した、赴任前の協力隊員による駐日ネパール大使(前列中央)への表敬訪問

Outline

正式名称 協力隊ネパール会
 設立時期 1988年9月
 法人格 任意団体

Organization

代表者 田中浩平
 (ネパール・食用作物・1992年度1次隊)
 会員数 約1200人
 入会資格 JICA海外協力隊員として
 ネパールで活動した人
 会費 3000円/数年

Management

最高意思決定機関 会員総会
 会員総会の頻度 毎年10月ごろに開催
 役員会の頻度 四半期に1度開催
 会員・役員間の
 連絡手段 会報(年2号)、メーリングリスト

Contact

問い合わせ窓口 nepalkai@chautara-kaze.com
 http://chautara-kaze.com
 情報発信の手段 http://chautara-kaze.com

ネパールに初めて協力隊員が派遣されたのは1970年。これまでの派遣人数は延べ1400人を超え、同国で活動した協力隊員で構成する当会も、会員数が約1200人になる大所帯となっている。

当会が継続的に取り組んできた活動は、国際協力イベントでのブースの出展や、ネパールに赴任する協力隊員の駐日ネパール大使への表敬訪問のコーディネートなど。また、在日ネパール人のコミュニティとのつながりもあり、ネパール人留学生による日本語スピーチコンテストへの協力なども行ってきた。

ネパールで2015年に発生し、甚大な被害をもたらした大地震に関する活動も、当会はその復興支援に尽力。現地の状況や必要とされる支援の内容

容、会員がNGO職員として携わる復興支援事業などを日本に伝える活動に取り組んだ。

今年7月には、コロナ禍のなかでネパール人を含む在日外国人に必要とされる支援について考えることを目的とするオンラインセミナーを開催。在日ネパール人の現状を紹介する在日ネパール人による講演などを内容とするもので、参加者は約150人にのぼった。

「当会の会員には、多文化共生社会づくりやネパールへの支援に関し、自分の置かれた立場でできることに取り組んでいる人も少なくありません。そうした会員たちの活動をバックアップする形で、当会としても両国をつなぐ役割を果たしていきたいと考えています」(田中代表)

Pick Up OB・OG会

「派遣国」や「職種」など、何かしらの共通項を持つ協力隊経験者によって構成するOB・OG会を、シリーズでご紹介していきます。

特定非営利活動法人 都市計画・建築関連OVの会 Ex-Volunteers Association for Architects(EVAA)

会の目的

都市計画・建築関連を専門分野とし、それらの知識と協力隊等での活動で蓄積した知見をもとに、①情報収集・情報提供、②派遣前・派遣中・帰国後の協力隊員への技術支援、③調査・研究、④国際交流・国際協力への提言、を行い、広く国際社会に役立たせるため、草の根の市民団体として交流を広げていくことを目指す。

「都市計画」や「建築」に関連する専門性を持つ協力隊経験者が中心メンバーとなる当会が発足したのは1998年。これまで、会員たちの専門性の高さを生かした活動を積み重ねてきた。その一つは、世界遺産に登録されている歴史的建造物の保存・修復に携わった協力隊員の活動事例をまとめた書の編集・発行だ。世界遺産の社会性を高めることを目的とした活動で、モロッコ、ケニア、トルコの3カ国の歴史的建造物に関する事例を紹介。民間企業の助成を受け、2005年に発行された。

09年には、HIVの検査とカウンセリングを行う施設(VCT施設)の改善方法についてアイデアをまとめたマニュアル書を編集。当会会員が協力隊員としてケニア、ガーナ、

マラウイ、セネガルでVCT施設の改善に携わるなかで収集した情報をもとにしたもので、利用者のプライバシーが守られる構造にする方法などを事例と共に紹介。日本語版、英語版、フランス語版、スペイン語版がJICAにより発行されている。

以上のほか、派遣前訓練中の協力隊候補生を対象とした特別講座の実施や、国際協力イベントでのブースの出展なども、恒例の活動として継続している。

「当会は『建築』などに止まらず、『感染症・エイズ対策』や『コミュニティ開発』などへと活動範囲を広げてきました。今後、ほかのOB・OG会と連携するなどとして、さらに活動の幅を広げていきたいと考えています」(設案代表)



上:2019年の協力隊まつりで開催した、「地域づくりと建築」をテーマにしたシンポジウム
 下:当会会員を含む同シンポジウムの参加者たち

Outline

正式名称 特定非営利活動法人 都市計画・建築関連OVの会
 Ex-Volunteers Association for Architects
 設立時期 1998年(法人格取得は2002年)
 法人格 特定非営利活動法人

Organization

代表者 設案知弘
 (株)毛利建築設計事務所所属
 会員数 43人
 入会資格 会の目的に賛同した個人および団体
 会費 3000円/年

Management

最高意思決定機関 会員総会
 会員総会の頻度 毎年8~9月に開催
 役員会の頻度 月に1度開催
 会員・役員間の
 主な連絡手段 コロナ禍以後はオンラインで定例会を実施

Contact

問い合わせ窓口 evaa.jocv@gmail.com
 03-3234-3675
 https://www.evaa-jocv.com/
 情報発信の手段 https://www.evaa-jocv.com/

先輩隊員の シューカツ記

就職先:

公益財団法人太平洋人材交流センター(財団法人)

活動概要: 開発途上国の人材育成事業とその活動を通しての国際交流促進 など

略歴

- 神戸女学院大学卒業後、大学院に進学。
- 2015年12月、青年海外協力隊員としてグアテマラに赴任。小・中学校で環境教育などにかかわる。
- 2017年12月、帰国。
- 2018年9月、立命館大学大学院国際関係研究科修了。
- 2019年4月、公益財団法人太平洋人材交流センターに入局。

隊員時代の活動を教えてください



グアテマラでコンポスト見学会を実施する狭間さん

グアテマラのケツアルテナンゴ県サンマテオ市で、環境教育隊員として活動しました。学校での環境教育活動の実施や、植林などの環境保全活動、分別回収の実施などに加え、カウンターパートを集めて、廃棄物処理の研修も企画・実施することができました。

今月の先輩隊員: 狭間 鮎奈さん

出身地: 大阪府 職種: 環境教育

生まれた年: 1990年 派遣国: グアテマラ

帰国時年齢: 27歳 隊次: 2015年度3次隊



子どもの頃なりたかった職業: ダンサー

現在の仕事は、JICAから受託している日本での研修コース実施や、関西の大学院に留学している学生向けのフィールドツアーのために研修で伺う訪問先の方々との連絡・日程調整・研修にかかる諸書類の作成などの業務、運営を担当しています。また、弊財団ではSDGsに関心・興味がある方に向けた交流イベント「上本町SDGs大学」も開催していますが、この運営メンバーとしてもかかわっています。

現在の就職先に決めた理由は?

「人材育成」に直接的にかかわれるというところ。

仕事で協力隊経験が生かされているところは?

訪日研修に参加したスペイン語圏からの研修員と、彼らの母語でコミュニケーションをとることができることです。スペイン語で話しかけると喜んでくれますし、私自身もスペイン語圏から研修員が来るとわかったときは嬉しく感じます。

研修員の国の街の様子やローカルなビジネスのこと、取り組みの情景が何となくですがイメージできること(事前に経済成長率など公表されている数字は見ますが、派遣国と比較をしたりしてイメージするようにしています)、また、訪日研修に参加している研修員の後ろにいる人たちの想像できることや派遣国で身をもって学んだ多種多様な価値観、文化の違いを前提に考えることができているというところは、協力隊経験者が持つメリットだと思っています。

仕事のやりがいを教えてください

研修員として来日し、研修を受けて帰国した研修員から、その後どのように研修を自分の仕事の中に生かしているかを伺えたときは嬉しかったです。また、日本には素敵な志をもって事業をされている方が大勢いらっしゃいます。その企業の取り組みなどを海外の行政官や経営者の方にご紹介でき、日本企業と海外の方がつながる場を提供できる、というのは非常に面白く、わくわくしながら日々業務に取り組んでいます。

今後の抱負をお願いします

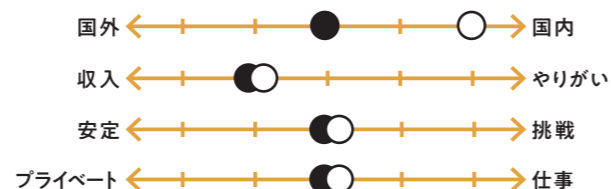
現在は、新型コロナウイルスの影響もあり、訪日研修という概念自体がままりませんが、もっと柔軟にさまざまなことにチャレンジができる、そんな機会も捉えています。より柔軟に途上国の人材育成について私たちは何ができるか、どんなことが求められているか、ニーズをしっかりと捉えてそのニーズに対してしっかりと貢献していきたいと考えています。

自己分析

強み	いろいろな人と抵抗なくかかわることができる。 前向きな思考で人の意見を取り入れながら仕事に取り組める。
弱み	ビジネスベースで物事を考える力が弱い。

仕事選びの今昔。重視したのは?

協力隊参加前=● 協力隊参加後=○



仕事選びで一番大切にしたいことは?

開発途上国の人材育成にかかわれるということ。

就活をとおして一番苦労したことは?

修士論文と就職活動を同時期に実施していたことは、精神的にも脳のキャパシティ的にも非常に大変でした。「今は修士論文に集中する時間」「今は就職活動に集中する時間」などとそれぞれ決め、ひとつひとつに集中し、また適度に息抜きをすることで乗り越えました。

協力隊経験を書類にどう書きましたか?

もともと漠然と国家の発展には教育が大事という思いがありましたが、協力隊に参加したことで強く「人材育成」分野にかかわりたいと気づくことができました。ターニングポイントになった点も含め、全面的に協力隊経験を入れ込んで、書類を作成しました。

MESSAGE

就活中に対応してくれる方は入職したら一緒に働く職員。ですので面接では躊躇わず、自然体で臨むのが良いと思います。

研修員に課題発表の仕方の説明をする狭間さん

シューカツREVIEW

就職活動を始めてから、終わるまでぶれることなく行動できたということが結果につながったと思います。

応募した数...6社
書類選考通過...6社
内定した数...2社

内定

GOOD WAY!

この面接前に4社と面接する機会があり場数を踏めたこと、また、各面接官から客観的な評価をいただいたことで自己分析を深めることができました。

2次試験(面接)

面接では、「志望動機」「弊財団以外の応募先」「自身の人からの評価」「入職したらやってみたい仕事」などを聞かれた。自身が面接官だとしたら、どんなことを志望者に聞いてみたいか、を予め想定をし、事前準備をしっかりと面接に臨んだ。

GOOD WAY!

自分自身の体験を踏まえて感じた思いを論文に素直に記載しました。その部分に共感いただけたのではないかと考えています。

応募開始(1次試験:書類)

応募書類は、履歴書、自己紹介書、成績証明書、卒業(見込)証明書、健康診断書と論文。論文のテーマは「私が途上国の人材育成支援にかかわりたい理由」。協力隊での経験を踏まえ、「自分たち自身で国を良くしていこうと考え、行動することの実現のためには人々を導く教育者を育てる人材育成がカギを握っていること」などを記載した。

情報収集を開始

国際キャリア総合情報「PARTNER」、青年海外協力隊相談役、各企業のウェブサイト、JICAの帰国隊員向け進路開拓セミナーを利用。「人材育成」という観点で活動している団体が、現在の就職先を含め2つしか見つからなかったため、当初はこの2つのみ書類を出して就職活動を終えようと思っていた。しかし、相談する方全員に「無謀だ」と言われ、練習も兼ねて幅広くいろいろな業界を見たり、応募書類を書いたりするようアドバイスをいただいた。また、関西の3人の相談役に会い、棚卸作業や書類について相談し、客観的な意見をいただいた。

シューカツ
START

帰国
3カ月後

帰国
1年4カ月後

帰国
7カ月後

帰国
6カ月後

帰国
5カ月後



JICA 海外協力隊ウェブサイト「帰国隊員の進路開拓についての相談受付」
▶ https://www.jica.go.jp/volunteer/obog/career_support/counselor/

※進路相談の対象は、青年海外協力隊および日系社会青年海外協力隊経験者のみとなります。
※カウンセラー/相談役により対応可能な日が異なりますので、あらかじめ電話またはメールでのご連絡をお願いします。



共栄館で柔道の練習をする生徒たち。共栄館という名は、講道館柔道の創設者嘉納治五郎師範の教えである「自他共栄」の「共栄」からお借りした

浦田さんが語る

これが「柔道」の魅力だ！

私が最初に柔道に魅了された理由は「柔良く剛を制す」を体感した瞬間でした！自分より体の大きな、力の強い相手に技が綺麗に決まって投げることができたときの快感！またその快感を味わいたくて地道な基礎訓練を反復することも頑張りました。そして歳を重ねるにつれて柔道の魅力は増えていきました。知恵の輪の様な寝技の理論を知ったとき、あいさつなど当たり前と思ってやってきた振る舞いを社会人になって褒められたとき、指導者になって自分自身では感じにくかった進化、進歩を生徒を通

して目の当たりに見れたときなど、柔道というのはただ技術を磨くだけでなく人生を豊かに、世の為、人の為になれるスポーツであることが魅力であると私は思います。



共栄館の生徒たちと浦田さん(後列右端)

JOCV SPORTS NEWS

平和・平等・協力・健康……「スポーツが持つ力」と自身の専門性を掛け合わせ、未来をつくりあげるJICA海外協力隊経験者たちの現在の活動・仕事を紹介します。

ルに柔道場を設立し、柔道を普及する。柔道指導者の浦田さんは、協力隊の任期を満了し帰国した4年後、その夢を持ちペルーに向かった。「柔道を教えるなら日本でもよいのになぜペルーなんですか？」と尋ねると、浦田さんはこう答えた。

「求められるところに行きたい、それが理由です。隊員としてペルーに行きたとき「日本から先生が来てくれた」と歓迎されました。開発途上国での柔道指導者は不足しているのが現状。ならば、私が行こうと決意しました」

浦田さんは、10歳で柔道を始め、高校卒業後、自衛隊に入隊。自衛隊で柔道指導補助を経て、柔道助教として正式に指導者となる。その際、指導の奥深さを知り、指導への理解を深めたいと考えたときに浮かんだのが協力隊だ。参加すれば2年間、指導のことだけを考えられる。休職し、協力隊に参加した。

ペルーでの活動で、日本柔道が求められていること、また柔道クラブの子どもの成長とそれを喜ぶ親の姿を見た。クラブの子はあいさつや礼などではきたが、浦田さんは整理整頓も伝えたいと靴を並べることを教えた。ある大会に参加したときのこと、他クラブの子の靴が散乱するなか、浦田さんのクラブの子の靴は綺麗に並んでいた。それを見た親が「うちの子どもはすごい」と言うのを聞き、浦田さんは「知らないだけで、知ったらそれが良いと思うのだ」と気づいた。ペルーは貧富の

差が大きく、マナーやモラルも全体的に高くない。そこに柔道を取り入れ、知ること、よくなる未来があるかもしれない。「定年したらペルーで柔道指導をしよう」と決め、帰国。復職した。帰国時42歳。働くうちに不安を覚えた。スペイン語を徐々に忘れ、体力も落ちていく。60歳を超えて海外で柔道場を建て、指導するのは難しいのではないかと2017年、46歳のとき、浦田さんは退職し、ペルーに向かった。

柔道場設立を計画当初は、旅行者として入国し、会社を立ち上げて柔道場を運営、投資家ビザで滞在を考えていた。しかし、計画をペルー在住の日本人に話したところ「リスクが高すぎる。基盤をつくってから、道場設立に移行したほうがいい」と助言された。

浦田さんは協力隊終了後、将来を考え日本語教師の資格を取得していた。ペルー日系人の日本語普及部コーディネーターに、現地で日本語教師としての雇用先を探してもらい、紹介されたのが現在働く中高一貫私立学校のオー



隊員時代の浦田さん。現地の柔道クラブで柔道指導を行った

耐えて芽吹きの時期を待つ

17年から学校で柔道教師として週に3回働き、18年に柔道クラブ「共栄館」を設立。学校と並行し、週6回、柔道を教えている。設立当初は学校で見つけた身体能力の高い子や、日本に興味のある子、また貧しくてクラブへの授業料を払えないがやる気のある子に声をかけ、特待生として無料で柔道を教えることから始めた。

その後、生徒数は30人に増加。また、「文武一道」の考えから、週に一度道場に机を並べ、日本語の授業も実施。ペルーの隊員に協力を仰いで、日本文化紹介をすることもあった。19年から試合に参加し、20年にはペルー柔道連盟に登録。国内のチャンピオンが出る大会への出場資格を得た。クラブに所属する生徒を、7月開催の日本の柔道大会に出場させるためのクラウドファンディングを1月に立ち上げ、成立。生徒数の増加から、広い柔道場も契約し、「飛躍の年」になる予定だった。

3月、新型コロナウイルス感染症拡

大の影響で、ペルーは国家緊急事態令が出た。その後試合は行われず、7月の来日も延期のうえ開催未定。「今は耐える時間です」と浦田さんは話す。だがその声は、不思議なことに落ち込んではいない。「耐える力」、それは柔道の練習で身につけ、自衛隊時代の訓練で強化し、異文化の中で生活する協力隊で磨きかけた、と浦田さんは感じている。その力が今、試されている。

「柔道は練習をしたら必ず結果が返ってくるということはありません。しかし、続けることで何らかの結果が見えている時期かもしれないのです」

その間も鍛錬を怠ることはない。結果を求めるのではなく、耐えて続ける。「現在、試行錯誤しながらオンライン指導を実施しています。成功している時期なら戻込みしてしまう挑戦でも、今だから失敗を恐れずにできます」

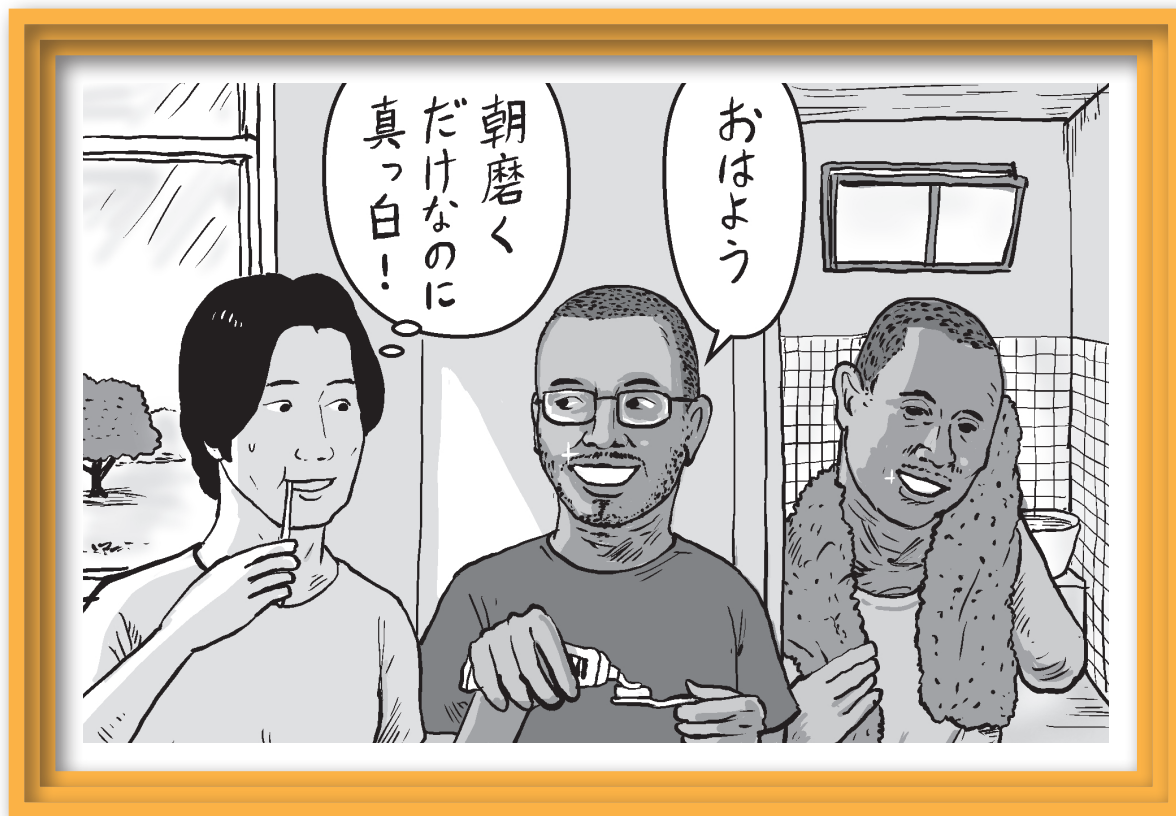
この状況が落ち着いたら、飛躍できる自信はある。芽吹く時期は予想できないが、続ける限りはその可能性があり、その日は必ずやってくることを浦田さんは経験から知っている。

PROFILE

浦田 太 (うらた ふうし)
1970年生まれ、福岡県出身、私立大牟田高校卒業後、航空自衛隊勤務を経て、2011年6月、青年海外協力隊員としてペルーに赴任。子どもたちに柔道や日本語、日本文化を教える。13年に帰国後、復職。17年に退職し、ペルーでの柔道指導をメインとした普及活動、日本語教育、日本文化紹介活動に従事している。私立女子学校 IEP GAKUSEI の柔道教師、柔道クラブ共栄館館長を務める。

つぶやき

お題 ▶ 歯磨き



イラスト=牧野良幸



今月の1枚

悔しい

現地では教員養成校のゲストハウスで教授と共に生活してきた。彼は夕飯を食べた後そのまま寝る。たまに宿泊者が来る。彼らもまた夕飯を食べた後そのまま寝る。起床後、水浴びとともに歯を磨くだけ。起床後と就寝前に歯を入念に磨く自分にとってはまぶしいほど、彼らの歯はなぜか真っ白なのだ。

ペンネーム：他人と比べがち さん（アフリカ・小学校教育・2018年度派遣）

★かわいい子には歯磨きをさせよ

学校ですれ違いざまにポケットから「先生、どうぞ」とお菓子をくれる子。チョコだらけの口で抱きついてくる子。みんなとっても可愛くて愛おしかった。でもそんな子どもたちの歯はボロボロなことが多く……。子どもたちに全力で伝えたい！「みんな～芸能人じゃなくても歯は命！ 歯磨きしいや～！」

ペンネーム：地球万歳 さん
（アジア・小学校教育・2018年度派遣）

★★ 枝の効果やいかに？

現地の人と話していると「あ、歯がない、黒い」と気がつくことがよくあり、歯磨きってどれくらいするんだろうと思っていた。ある日、友達とご飯を食べた後、彼女は細い枝を取り出して歯を磨き始めた！ 任地はわりと都会だったのでびっくりしていると、そんな私を見て友達は近くの売店でその歯磨き用の枝を買ってくれた。でも、使用方法がよくわからず、なんだか怖くて使えないままにしておいたらカビが……。ごめん、友達。

ペンネーム：イネス さん
（中東・青少年活動・2018年度派遣）

★★★ 巨大歯ブラシ

これまでの人生、歯を大切に生きてきた私は、慣れたものを使いたいと日本で歯ブラシを買って派遣国へ。水が出ない日も、順調な歯みがきライフを送っていたのですが、任地の歯みがき事情が気になり、歯ブラシを買ってみることに。しかし日本の物と比べるとブラシが巨大です。それから、任地の歯ブラシは靴やお風呂の壁を磨くお掃除グッズとして活躍したのです。

ペンネーム：モンキーバナナ さん
（アフリカ・小学校教育・2018年度派遣）

募集中のお題

「お風呂」「食器洗い」「ゲーム」「味付け」

投稿は『クロスロード』編集室まで
（P35をご覧ください）

あなたのつぶやきが
イラストになるかも!?

2020年度1次隊の候補者に向けた、特別派遣前訓練の開始

3月19日に派遣前訓練開始延期の通知を受けて以来、この日をそれぞれに待ち続けてくれた2020年度1次隊の候補者のうち希望者に向けた特別派遣前訓練が、8月26日より開始し、第1次グループの35人が全国12市町村に配置されました。

8月27日には各地とJICA青年海外協力隊事務局を繋ぎ、小林広幸こばやしひろゆき青年海外協力隊事務局長の講話と候補者第1次グループ代表の決意表明を行いました。第1次グループ全員の元気な姿と各地の雰囲気きょうきが伝わる遠隔ならではのプログラムとなりました。

今後は9月中旬に約10人、9月下旬に約20人が新たに配置される予定で、3カ月間の地域実践型の訓練に従事する予定です。

福岡の協力隊支援団体が設立40周年を記念し、式典や協力隊写真展を開催



記念式典の参加者

福岡県青年海外協力隊を支援する会設立40周年を記念し、9月13日に福岡市内で記念式典、海外協力隊写真展、事業説明会が行われました。式典では長年にわたり隊員を支援して下さった個人や団体に感謝状が授与されました。

事業説明会では隊員2人が体験発表を行い、市民約30人が参加、また12日、13日の2日にわたり開催した写真展は隊員23人の活動写真が展示され、多くの来場者で賑わいました。

「原爆展」のオンラインセミナーを実施

8月8日に一般の参加者向け、9月15日にJICA関係者向けに、原爆の理解促進などを行う「原爆展」のオンラインセミナーを実施しました（主催：JICA広島デスク）。「有志の隊員が現地で実施している原爆展についてもっと多くの人に知ってもらいたい」という思いを、参加者に届けられたのではないかと思います。

実際に現地で原爆展を実施してみたい隊員はJICA広島デスクまでご連絡ください！

▶ JICA広島デスク jicadesk@pcf.city.hiroshima.jp



一般の参加者に向けたオンラインセミナー

ペルー協力隊派遣40周年を記念し、隊員の記念インタビュー記事を掲載

2020年、ペルーは青年海外協力隊派遣40周年を迎えました。ペルーで活動する隊員と共に関係者の皆様に感謝の気持ちを伝える絶好の機会として、JICAペルー事務所ではさまざまな行事を予定しておりましたが、新型コロナウイルス感染症拡大で困難な状況となりました。しかし、この40年間で530人以上の隊員がペルーの人々と紡いできた信頼がここで途切れることなく、両国の平和な未来につながることを願い、ペルーでの隊員派遣の歴史や感謝の気持ちをウェブサイトなどで発信していきます。

▶ JICAペルー 40周年記念ウェブサイト

<https://www.jica.go.jp/peru/office/others/40th/index.html>



記念ロゴはインカの石組み。ペルーと日本の信頼関係が強固に永く続くようにという願いが込められています

クロスロード

令和2年10月号【第56巻第9号 通巻661号】
発行日 令和2年10月1日

編集・発行：
独立行政法人国際協力機構青年海外協力隊事務局
〒100-0004 東京都千代田区大手町1-4-1
竹橋合同ビル

『クロスロード』ウェブ版は以下のアドレスからアクセスできます。
<https://www.jica.go.jp/volunteer/outline/publication/pamphlet/crossroad/index.html>



ご意見・ご感想をお聞かせください。アイデアも大募集！

今号をお読みになり、どのようにお感じになりましたか。ご感想・ご意見をお寄せください。また、今後取り上げてほしい企画や特集のテーマ、ご紹介いただけるアイデアがございましたら、下記のメールアドレスにお送りください。



一般社団法人協力隊を育てる会『クロスロード』編集室
crossroads@sojocv.or.jp



以下のようなアイデア・投稿を募集中です

- 派遣国での活動・生活での「失敗」談、お聞かせください。
- 活動や日常でちょっと役立つ、そんな技をお伝えください。もしくはこんな技を紹介してほしいというご要望もお待ちしております。
- P34の下に記載されている「お題」で派遣国での活動・生活のことをつぶやいてみませんか。
- 日本でつくれる派遣国レシピをお寄せください。

隊員めし

おかわり!

日本でつくる現地の「めし」は活力の源



隊員's ポイント!
いわしの下味はしっかりつけること!

モロッコで活動しているとき、ほぼ毎日、昼食にタジン鍋をいただいていた。タジン鍋とは、香辛料で味付けした肉や野菜などを蒸し煮にした料理のこと。現地でお世話になったフランス語の先生のお家でモロッコ料理をご馳走になったり、教えてもらったりもしていました。先生に教わったタジン鍋は、いわしではなく肉だったのですが、モロッコではいわしが安く、現地でも身近な食材。日本に帰ってから、モロッコ料理を友人に知ってもらおうと考えてつくったのが、「いわしのタジン」でした。タジン鍋は、蒸している間に他の料理をつくるができます。1時間あれば、夕食できあがり〜

モロッコ人はイスラム教徒がほとんどで、私の周りにいた人は、信仰深く、真面目で、優しく、愛情深い人が多く、そんなモロッコの人が私は好きでした。帰国した今は、モロッコという国、家庭料理をたくさんの方に紹介したいと思っています。

今月の料理人



やまおか みさこ
山森美也子さん(シニア海外ボランティア/モロッコ・料理・2013年度4次隊)
●活動内容: 観光省が所管するホテル・観光高等技術専門学校に配属され、日本料理の実習授業、レシピ集の作成などを行う。

※派遣名称は派遣当時のものです。

材料を切って蒸すだけ モロッコの家料理「タジン鍋」

材料(2人分)

いわし(頭と内臓を取ったもの・中) …2尾
レモン…1/4個
トマト(中) …1個
玉ネギ(中) …1個
ズッキーニ…1/2個
コリアンダー(細かく刻む) ※…大さじ1(生がなければ、粉末でも可)
ニンニク…1かけ
オリーブオイル…大さじ1
ショウガ(すりおろす) …1/2かけ
塩・こしょう…少々
水…1/4カップ強
クミン・ターメリック…少々
※コリアンダーはパクチー、シャンツァイとも言われる

つくり方

①バットにいわしを並べ、塩・こしょうをする。その上に輪切りにしたレモン、オリーブオイル、ショウガ、クミン、ターメリック、コ

リアンダーを入れ、30分漬け込む。

- ②タジン鍋(浅めの両手鍋、フライパンでも可)にオリーブオイル(分量外・大さじ1)を入れて熱し、薄切りにした玉ネギ、みじん切りにしたニンニクを入れて、炒める。角切りにしたトマト、薄く輪切りにしたズッキーニを加え、塩・こしょうをする。
- ③①のいわしとレモン、水を入れ、ふたをして、15〜20分煮たら、完成。



①材料。コリアンダーが苦手な人は、パセリ・小ネギで代替可



②使用したタジン鍋。出来上がったときの鍋はとても熱いので要注意



今月号の表紙 ソロモン



かくた ひろよ
文=角田紘世さん
(障害児・者支援・2017年度3次隊)

私の配属先は、ソロモン唯一の特別支援学校でした。日本で作業療法士として働いていたので、肢体不自由の子どものクラスでのリハビリなどを担当しました。写真はそうした活動のひとつです。教育現場で働くことは初めての経験で、難しさを感じ、悩むこともありましたが、毎日学校へ行く子どもたちが笑顔で待っていてくれるため、自然と私も笑顔になりました。キラキラとした笑顔を見せてくれる子どもたちと過ごした時間は、私にとって宝物です。